

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

## 10



第七十九卷 第十号 日本幼稚園協会

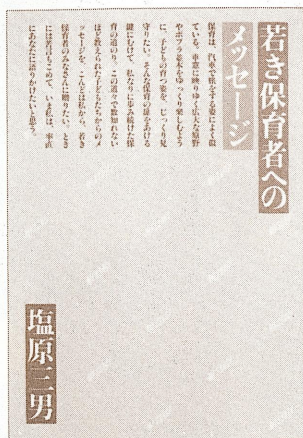


# 好評発売中

## 若き保育者へのメッセージ

塩原三男・著

B 6判 200頁 900円 千160円

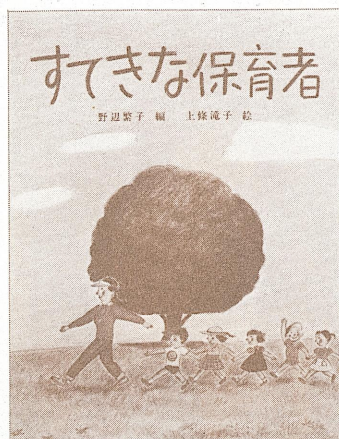


大学で保育者養成に心をくだく著者は、若い保育者が特に苦勞し悩む問題点に長年つきあってきました。これをふまえて、わかりやすい事例をもとに書きおろされたのが本書です。

## すてきな保育者

野辺繁子・編/上條滝子・絵

B 5変型判 64頁 1,200円 千160円



これから保育の仕事に携わろうとする方や保育者になりたての若い人々のための保育入門書。読みやすい文章と美しい絵が、保育の問題を解決していく際のヒントを与えてくれます。

くわしくはフレーベル館代理店・支社・支店・営業所・特約店または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

## フレーベル館

# 幼児の教育

第七十九卷 第十号





# 幼児の教育 目次

——第七十九卷 十月号——

表紙 駒宮録郎  
カッ ト 中島英子

生涯教育からみた幼児期の教育の重要性…………… 莊 司 雅 子…(4)

倉橋惣三への一つの接近(その四)

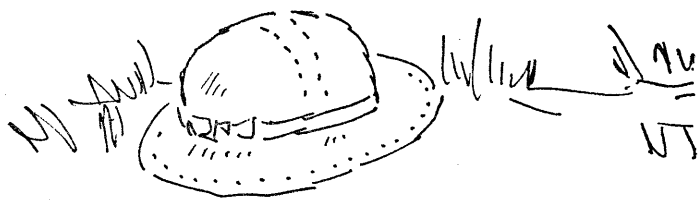
——「たけくらべ論」に見られる「子ども観」

の多層性…………… 本 田 和 子…(6)

マツタケと天気…………… 大 後 美 保…(13)

食品としてのきのこ…………… 吉 松 藤 子…(16)





子どもの秋……………佐藤敏英…(18)

ショウロ・しょうろ・松露……………村田修子…(20)

キノコと生活……………曾根田正己…(22)

☆講演

三つのこと——育児(育ての心)と教育と救い……………周郷 博…(27)

私たちの保育

——園全体でとりくむ保育——……………大橋利恵子…(38)

続・保育の中の小さなこと大切なこと①……………守永英子…(44)

遊びの発見②……………有木昭久…(46)

わたくしのシルクロード⑥……………横張和子…(54)

『復刻・幼児の教育』のお知らせ……………(62)

## 生涯教育からみた幼児期の教育の重要性

莊 司 雅 子

老人ホームを訪問したある方から聞いた話である。ホームに居住している多くの高齢者の中には、明るく朗らかで仲間とよく協調して楽しい老後生活をしている人がいるものもある。またいつも仲間からはなれて、独り淋しく無口で暗い孤独の生活をしている人も多くいるという。それをきいて私も十数年前にコペンハーゲンの「老人の町」を訪れた時のことを想い出した。当時案内してくれた寮母の話によると、健康な老人たちはそれぞれ好みの仕事を持ち、しかもときどき老いらくの花も咲くという。一般に老齢期に入れば身体的の各機能が弱るのは自然の理であって如何ともすることができないが、精神機能はほど老衰していない限り身体ほどの早い老化はないように思われる。いまあげた老人ホームや「老人の町」にみる高齢者たちの社会性の発達の相違は一般にすでに幼児期の社会性の発達の相違からきていると多く指摘されている。

生涯教育はここ数年来強調されているが、これはシカゴ大学教授のハヴィガーストが二〇年前出した『人間の発達課題と教育』の中で、人間の一生の各々の発達段階にはそれぞれに固有の発達課題をもっているということを叙述している。そしてその課題を解決することが学習であり教育である。しかも人間は幼少年期だけでなく、青年・壮年・老年の各時期にもそれぞれ発達すべき課題をもっているから、一生を通じて学習し、教育を受けなければならない。そういうわけで人間は、学校生活を終えて社会に出ても継続的に勉強し、学習

しなければならない。生涯教育とか継続教育とかいわれているのはこのことである。

さて、個人の生涯をめぐるいろいろの時期に発達課題は生ずるものであるが、この課題を立派に成就すれば、個人は幸福になり、その後の課題も成功するが、失敗すれば不幸になり、社会で認められずその後の課題の達成も困難になってしまう。課題のなかにはその時期に一度しかあらわれてこないものと、各々の時期にくりかえしあらわれてくるものがある。たとえば言葉の学習や基本的習慣の形成は幼児期にあらわれる一回的な課題であり、この時期にこれを解決しないと、その後に学習しても成功しない。また読み・書き・数えの基礎学力は児童期に解決すべき課題である。ところが社会性の発達課題は幼児期に始まるが、これは児童期には同性グループに再びあらわれ、青年期には異性間にあらわれ、壮年・中年期には同僚や先輩、後輩にあらわれる。そしてその解決に成功するよう学習しなければならない。老齢期になって社会の第一線から引退した後は、新しく同輩や若輩とうまく交わらねばならないという課題に出合うわけである。そこで、最初に述べたような老人ホームや「老人の町」の人びと

の社会性の発達の相異は、いうまでもなく、前の発達段階における社会性の発達課題に成功している場合と、成功していない場合とに原因している。しかも最も大きい原因は、この社会性の発達の始まりにその課題解決に成功しているかいないかというところにある。というのは社会性の発達課題のように各々の時期に異なる形でくりかえしあらわれてくる場合は、その初期の課題解決が最も重要である。というのはその始まりの解決に失敗すると、次の時期の課題解決に失敗することになり、その失敗がまた次の失敗になって、結局老年期の失敗に続くことになる。

以上は社会性の発達だけに例をとったが、その他にも、くりかえしあらわれるいくらかの発達課題があるが、それはいずれも幼児期の始まりに成功していて、いないとその後に影響するのである。こういう立場から幼児期の教育を考えると、幼児期は一生の各時期の発達課題の解決の始まる時期であるから、保育や教育はすべてこの時期に果たすべき課題を幼児が自ら解決するように助けたり指導したりすることであるといえる。

(聖和女子大学)



## 倉橋惣三への一つの接近（その四）

——「たけくらべ論」に見られる「子ども観」の多層性——

本 田 和 子

### ◆ 終章

#### ① 二つの「徴」

倉橋惣三は、「たけくらべ」を論じたその一文を、次のように結んだ。すなわち、「かくて、美登利の思いは、時雨にぬれる紅べに入友仙のいじらしい姿に終わり、信如の思いはある霜の朝格子門に、水仙の作り花となって終わる。どこまでも児童の世界を世界としたこの作の、余韻をだに大人の世界へ引き延ばしてないところ

ろが嬉しい。『たけくらべ』は児童描写文学の最も純なるものである」と。  
\*1

物語世界における子どもの時間は、このような形で幕を降ろし、子どもたちは、それぞれに「子どもであること」に訣別した。そして、倉橋は、巢立っていく彼らのありようを、右のように、文脈の中から二つの隠喩を抜き出すことで、物語ろうとするのだ。すなわち、「時雨にぬれる紅入友仙」と、「水仙の作り花」と……。

子ども仲間の女王であった美登利は、一人の「女」へとメタモルフオーゼした。くり返し述べてきたように、その後の彼女に訪

れるのは、遊里の女として春を翳ぐ日々である。異性との交わりも、遊廓という囿われた空間の中で、夜の仇花として開花し、昼の光の下では結実することもなく、束の間の生命を終えることだろう。それは、さながら、差し出された友仙の一切れが、濡れた路上で時雨に叩かれ、想う人の手に取られることもなく、空しく色褪せていくのに譬えられる。雨ににじんで流れ出す紅の色は、幼い遊女が流すであろう血涙であり、ふみつけられ、泥にまみれて朽ちていく布きれは、彼女の無惨な肉体である。

作者である一葉は、同じ性に連なる「もの書き」として、少女が「男」になり得ぬことの悲しみを、誰よりもよく、知っていたのであった。

これに比して、「男」へと歩み出す信如の後姿は、「水仙の作り花」で飾られる。しかも、花の贈り主は今日を限りに遠くへ去ったが、その花は、想い人の手に取られ、違い棚に飾られて清らかな姿をいとしまれる。以後再び、会うことも難い自身の姿を、朽ちぬ作り花に託して残される者の中にとどめようとは、当人の意図を超えて、残酷な所業であろう。枯れることを知らない造花があらわにするのは、「いつまでも変ることがない」という愛のしるしであろうか、それとも、「少年の日の愛は、所詮、虚構のものでしかない」という、冷い告白なのだろうか。

いずれにせよ、「紅入り友仙」と「水仙の造花」は、「大音寺前」の女性に訪れる運命の苛酷さと、男性のそれとを、鮮かに対比させる二つの「徴」なのだ。

そして、倉橋の感受性は、物語言語の文脈が浮かび上らせる二つの「徴」を、こうして、あやまず選び出し、作品を結ぶ要として位置づけたのであった。このことは、私どもの前に、倉橋の持つ次のような特質を垣間見せている。すなわち、ことがらを把握し、或いは表現するに当たって、彼は、ふさわしい隠喩によってそれを行なうのだ。この初期の論文に見られるのが、その端的な表われなのである。

## ② 科学と詩

倉橋の保育論は客観性に乏しく、その文章は、科学的厳密性に欠けるという批判が、時としてくり返されることがある。そして、これらの見解は、結果として、私どもを、次のような終着点に到達させようとする。彼は「学者」ではなく、子ども好きな「実践指導者」であり、そして、何よりも「詩人」だったのではないかと。

然し、詩作を生き方の中心に置く人を「詩人」と呼ぶなら、彼

は、必ずしもその範疇になく、事実、いわゆる「詩集」と言う類いの本を刊行しているわけではない。彼の本質が、「詩人」にこそふさわしいと言われるのは、人と世界、とりわけ子どもに向けられるまなざしが、実体を究めようとして分析的・解剖的に働くのではなく、その意味を直観して象徴的表現で把握するという、そんな傾向のゆえであつた。例えば、彼にとつて、母とは「教える前に慰むべき人」であり、「導く前にいたわるべき人」であつた。『すべての母は悲願の母』だと言うのである。

母にまつわるこの一連の言葉は、戦前の日本の母たち、特に、倉橋が、文部省の社会教育官として遠く足を伸ばした満州の僻地で、つましく家を守つた女たちのありようを、何よりもよく言い現わして妙である。昭和の初め、わが国の植民地政策の一環として、満州の奥地へ伸びる鉄道事業のにない手である、職員とその家族たちは、孤独と辛苦の生涯を余儀なくされていた。一望の高梁畑の中に、点々と散在する小さな舎宅の中で、若い妻は幼児を抱き、「出張がちな夫の留守をまもつて」、<sup>\*4</sup>「日本の子守り唄をうたつて」<sup>\*5</sup>いたのである。そんな母たちに対して、倉橋は、軽々しく家庭教育を説き得なかつたと言う。彼は、その時の己れのありようを、「観音三十三種の化身はかなわずとするも」、<sup>\*6</sup>「せめて母の哀思の一つをでも救う一助となりたい」と願いつつ、「凡力

行脚」<sup>\*8</sup>を続けた、と表現している。

僻地勤務の満鉄職員の妻として、海を渡ってきた女たちは、頼るべき人もなく、友人もないまゝに、早々と、母にならねばならなかつた。不順な気候や悪疫からわが子を守るべく、乏しい育児知識をかき集め、鎮守の社とも先祖の墓とも無縁の他郷で、日本人らしく成長させようとちえをしぼる。そんな揚句の、壁に貼られた富士の絵であり、日本の子守唄であつたろう。現代風の表現を借りるなら、彼女たちの現実には、「核家族」ゆえの不安定さと、「育児ノイローゼ」の危険に満ち／＼している。そんな母たちにとつては、何よりも、その存在全体をまるごと受容されることこそ肝要であり、知識を与えられるにもまして、その緊張から解かれることこそ重要なのだ。このような状況下の家庭教育を、倉橋は、「慰むべく」、「いたわるべき」母との出会い、という形で、把握し表現したのであつた。

倉橋の著作の中から、右のような例文を抜き出すことは容易である。例えば、保育者とは、子どもらの「小さき太陽」<sup>\*9</sup>であり、保育の意義は「温」<sup>\*10</sup>の一字に尽くされる。幼児の顔は夏の盛りに「涼しく」<sup>\*11</sup>大人のそれは「暑くるしく」<sup>\*12</sup>我執にとらわれていゝる。そして、「かすかにして短き心もちを見落とさない人」<sup>\*13</sup>だけが、子どもと共にいることが出来るのだ。こうして、倉橋の文章



は、その豊富な隠喩によって、読む者の感受性に訴え、心情を肥やすべき糧として機能する。但し、一体「小さき太陽」とは何か、「温」の保育とはどのような構造を持つのか、などと開き直るならば、時としてそれらの「言葉たち」は、多義性というペールの中に身をかくし、幾つかの暗示と手がかりだけを残して消えていきかねないのだ。

然しながら、先にも触れたように、倉橋は、児童研究には二つの道があることを力説していた。<sup>\*14</sup>すなわち、「科学的児童研究」

と「文学的児童研究」がそれである。言葉を換えるなら、これは、子どもに対する複眼視のすゝめであった。そして、彼の初期の著作を通じてあらわにされるのは、この二重視力の所産である。例えば、「樋口一葉論」を公にする一方で、スタンレー・ホール、リボー、モッソーなど、当時の心理学者たちの最新の知見を紹介したりする活動がそれである。<sup>\*15</sup>科学的心理学の洗礼を受けた学徒として、幼児保育の趨勢が、新しい児童研究の動向と無縁ではあり得ぬことを、誰よりもよく把握していたのであろう。

にもかゝらず、その後の彼の歩みは、いわゆる心理学徒のそれではなく、「書かれたもの」もまた、いわゆる「科学的」というタイトルを冠し難いものが多い。つまり、彼のまなざしは、「科学」よりも「詩」に偏って作動したように見えるのだ。倉橋

には、「保育詩人」の称号こそがふさわしい、と言う評価が生まれてくる所以である。

こゝに、私は、倉橋の固有のありようを見る。すなわち、「幼児保育」というフィールドに密着し、そこに身を浸した彼の生き方である。幼児たちの生きた生活の中に身を置くことで、彼の感受性と直観力は、いやが上にも純化され、彼のまなざしは、その時々々に生起する現象の本質を、鋭く洞察し続けたことであろう。

然し、そのゆえにまた、幼児たちを対象化し、彼らとの間に距離を置いて、いわゆる「客観的」と称される「科学の眼」で眺めることを、倉橋の「保育的性格」が肯<sup>がよ</sup>じなかつたのである。

倉橋は、その「フレーベル論」において、フレーベルの執拗なまでの理屈っぽさと教育的天才としての直截な閃きという、相矛盾する二つの面に言及している。<sup>\*16</sup>そして、フレーベルの真の偉大さは、その理論にもまして、「教育的性格」にあると結論づける。「教育的性格」とは、「児童生活への直覚的な洞察力と、従って伴う、児童との率直な接触性<sup>\*17</sup>とに他ならない」と言うのだ。児童と一体化し得る真率性こそ、「教育的性格」の極致なのだ。

そして、彼自身もまた、己れの「保育的性格」に忠実であろうとした。幼児と一つになって生きることを是とするとき、そこから身を離し、分析と解剖のためのメスを振るうことは、肯じ難い

所業である。科学的児童研究は、それなりに進展すべきものとしても、彼自身が身を置く領域ではなかった。結果として、彼の一方の眼、すなわち「科学のまなざし」は、「科学的研究の遂行」という形で己れを主張せず、「保育的性格」の中に溶かしこまれたのである。

幼児との生活の中で、「科学の眼」と「文学の眼」は、一つとなって肉体に凝縮される。倉橋は、二つの視力、二つの認識の統合者たる一箇の存在として、一人々々の幼児と向き合った。向き合った彼らは、同じ人間としての尊厳を主張しつつも、大人とは異なる独自の生の所有者として、大人を魅了し、時に困惑させる。極言するなら、彼らは、異文化集団の構成員なのだ。

従って、彼らとのコミュニケーションは、日常的な言語に依存するにもまして、彼らの身ぶりや表情、或いはかゝわりを持つ「ものたち」のたゞすまいに、依存するところが大きい。倉橋が、彼らとの交流を表現するのに、「詩的言語」を多用したのは、このゆえであつたろう。子どもたちが語り出す音声言語ならぬ表出、それらが、言語と文字の世界に姿を現わすとき、自ずから隠喩や象徴的表現が活躍するのだ。多義的に過ぎ、科学的厳密性に欠けると評される彼の文章は、幼い人たちとの世界を、大人たちに伝えるべく、倉橋によってあらわにされた「翻訳文」のスタ

イルだったのである。

倉橋は、必ずしも、詩作を試みたものではなかった。幼児との生活において直観され、洞察された意味を、大人の世界に置き換えようとして、彼がつかまえたのが「詩的言語」であつた、と言うことなのだ。従って、より正確には、それは、倉橋流に編み出された「保育的言語」なのである。そして、彼をめぐる保育界の人々は、それら倉橋流の言葉と文章を通じて、幼児と共なる生活の豊かさといき／＼しさを、改めて感得し、その魅力に酔ったのである。

### ③ この子どもの「いま」

倉橋の保育観は、一般に児童中心主義と称され、その児童観は、「大正童心主義」と同一であるかのように、みなされることが多い。教育と呼ばれる営みが、時に、先行世代の掲げる目的や理想に向けて、子どもたちを効率よく歩ませる試みとなりがちであることを考えるなら、それらとの対比において、倉橋の保育観は明きらかに「児童中心」の名に恥じない。彼にとっては、何ものにもまして、目の前に、「いま」存在する子どもこそすべてだったのだから。

然し、それは、果して「童心主義」と同義なのか、否か。「童心主義」が、内なる世界に錘を下ろし、「内在する児童性」を普遍とみなし、そこに永遠の価値を置くところから発しているのに比して、倉橋の場合は、常に「外在する他者」としての子どもが存在した。街中にも野辺にも、青山御所にも路地裏にも、遠い異郷にも、そして、絵画や文学の中にも、至るところに子どもは跳梁し、彼の視線は、絶えずそれを追い続けた。

しかも、それら「外在する子ども」は、彼に内在する「永遠の童性」と常に共鳴し、照応し合う。外在する子どもとの出会いが、内なる子どもを目覚めさせるのか、或いは、その逆であろうか。いずれが先、いずれが後とも分ち難い、絶妙の対応がそこにあった。

いわゆる「児童中心主義」を、「対象としての子ども」に依拠する教育思潮、そして、「童心主義」を、「内在する児童性」に価値を見出す思潮、と区別するとすれば、倉橋のは、両者の出会いに出現する「倉橋式子ども主義」と言い得る。人間の元型としての「児童性」と、「いま、子どもである」生きた具体とが、共に築き上げる特有の世界、それが、倉橋の保育観を誕生させる土壌なのである。

目の前に「生きた具体」として出現する子どもたちは、一人々

々固有のありようで己れを開示し、彼らに触発されて内なる子どもも、様々に、その多次元性をあらわにする。結果として、倉橋には、子どもとは「こういうもの」、或いは「こうあるべき」という形で、「子ども像」を描き出すことは困難であった。

倉橋保育論への批判として、しばしば、次のような見解が表明される。すなわち、「彼は、一体、どのような子ども像を目指していたのだろうか」と。彼は、恐らくは、どんな子どもの「像」をも抱くことをしなかったのではないか。「いま、目の前にいる一人の子ども」こそ、彼にとって、子どもの実在でもあり、当為でもあったのであろう。そんなありようを、彼自身も、次のように総括している。すなわち、「彼が後になって、理想の子どもとか、チピカル・チャイルドとかいうことばにあまり実感がもてなくて、各々の子どもこそ、その子どもだという具体的児童観をしつかりもち得るようになったことは、この『子供遍歴時代』(Wander Jahre)の賜と、今でも、その時の子どもたちに感謝している」と。<sup>\*18</sup>

私は、ここで、若き日の倉橋が、「たけくらべ」の子ども群像とりわけ、女主人公の美登利に心魅かれた経緯を追いつながら、彼の詩的なまなざしに映じたその「意味」を読み解くことを試みてきた。倉橋の前に、「子ども時代」は、瞬間々々を遊びに燃焼さ



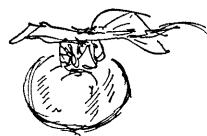
せる無時間性と、成長という必然を負うものとしての有限性の、両義性において出現し、美登利もまた、聖と俗との境界に位置し、男性性と女性性、処女性と娼婦性、無垢と汚濁などの、多義性においてその個性を主張していた。彼女と、彼女を取り巻く子どもたちは、いわゆる「子どもは……」という言葉で括られるような「ディピカル・チャイルド」ではなかった。然し、美登利と向き合った倉橋は、そこに紛うかたなき魅力的な少女を見、そのすべてを認め、愛したのである。

(了)



- \*1 倉橋惣三「一葉女史の小説に現われたる子供」選集第四卷
- \*2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 18 倉橋惣三「子供讃歌」選集第一卷
- \*9, 10, 11, 12, 13 倉橋惣三「育ての心」選集第三卷
- \*14 倉橋惣三「一葉女史の小説に現われたる子供」附言、選集第四卷
- \*15 倉橋惣三「子供の臆病」選集第四卷
- \*16, 17 倉橋惣三「フレーベル」選集第一卷

# マツタケと天気



大後 美保



日本のキノコ類のうちで確実に食べられるものは数百種あり、一方毒のあるものが百数十種ぐらゐる。食べられるキノコのうちでマツタケは香りも味も最も優れていて、食用天然キノコの王者といってよく、秋の季節食としても、また高価な点でも最高である。

マツタケは昔から高級な食物であった。平安朝の終りに鳥羽上皇が宇治の平等院へ行啓された時に、マツタケを召しあがったという記録があり、また拾遺集にマツタケをよんだ歌

が数首あり、鎌倉、室町時代に宮中や幕府の宴会の後でマツタケを籠に入れて土産にしている。

マツタケのあの良い香りは、桂皮酸メチルと、マツタケオールなどの精であつて、香りがよいだけでなく、デンプン、タンパク質の消化酵素も含まれている。マツタケの香りは日本人にはよい香りであるが、欧米人にはあまり好まれないようである。

マツタケの風味は主にマツタケの柄の部分にあり、マツタケのカサが開くと、水分や香りが逃げて風味がぐんと落ちてしまう。それでマツタケはカサが開く前のずんぐり太って身

のしまっているものを選ぶとよい。

鮮度のよいものは白っぽく、時間がたつと茶褐色が濃くなる。したがってカサが開いていないほど高価で、カサが開ききったものは、軸が堅く、商品価値が落ちる。とくに軸が白く、太く、指で押えるとやわらかいものは虫食いであるからよくない。



マツタケは環境条件への選り好みがちびしく、どこでも育つわけではない。マツタケの生える環境について和漢三才図会に「赤松の陰処、秋雨湿に醸されて生ず」とあり、実際にたしかにそうなのである。

マツタケは二十二年生以上の赤松の根が十分張り、また根が表土近くに伸びるために、地下一メートルくらいのところに岩磐のあるところで、落葉や雑草の少ないところによく生える。

京都、岡山、香川、広島などの花崗岩地帯でよいものが多くとれるのは、このためである。土地の条件が良ければクロマツ、エゾマツ、トドマツその他でも生える。たとえば、阿寒岳のハイマツ地帯や、富士山のツガ林にもマツタケの生え

るところがある。これは、こうした環境による地温にも原因している。

高須氏がマツタケ松林内の気象について調べた結果によると、マツタケの発育と最も密接な関係にある深さ五センチの地温は平地のそれにくらべて、日変化、日較差がいずれも極めて小さく、一一・五度の恒温状態で、秋に地中温度が一・二・五度から一七度くらいになると発生し、適温は一五・六度であった。これは岡山で調べたものであり、寒地ではもう少し温度が低い。母岩がちがうと、植生、地温などもちがいが、石灰岩や関東ローム層のようなところではマツタケは生えない。

こうした産地の環境のちがいにより、マツタケの香味は微妙にちがう。昔は関西では洛東の稲荷山、洛西の竜安寺山のマツタケが第一で、嵯峨北山のものがこれに次ぐといわれていた。

広島、岡山、京都、香川などの各府県を始めとしてマツタケは主に西日本で生産するが長野県、岩手県などでも生産する。しかしこれらの県のマツタケは、西日本より約一か月早く八月に出廻るが、香が弱く、小形で、西日本のものに劣る。

同じ西日本でも産地により多少ちがひ。丹波地方のマツタケは、岡山、広島にくらべてカサの色が濃く、絵にかいたような理想的なマツタケ形をしているので、他の地方のものより高価で、進物用として喜ばれている。



マツタケの豊凶は天候と密接な関係にある。

マツタケの豊凶の傾向を見ると、平年以上によくとれる年よりも、平年以下になる年のほうが多く、凶作年には平年の六五%減になることもある。このようにマツタケの作柄に豊凶があるのは、その年の天候が大きく影響するからである。

マツタケの菌糸は四月ごろから成長しはじめ、六月に最もよく成長し、九月下旬となり、冷気が訪れると菌糸から子実体、いわゆるマツタケが生える。こうした生長過程に気象が影響する。

マツタケの豊凶と気象との関係について調べた結果による

と、八月中旬から九月中旬までの昼夜の気温差と特に密接な関係のあることが認められ、昼夜の温度差が小さい年、いいかえれば晴天の日があまり多くない年に収量が多くなるといふ傾向のあることが認められている。またマツタケの豊凶は十月の気象とも案外密接な関係があつて、十月の平均最低気温が高いほど、また湿度が高いほど収量が多くなる傾向がある。

したがつて、夏が干ばつの年や、九月から十月にかけて雨の少ない年はだいたい凶作となると見てよい。

また、マツタケは早くとれはじめる年には豊作になる傾向があり、こうした年にはおそくまでとれる。一方、マツタケがおそくとれはじめた年には早くとれなくなり、結局不作となる傾向がある。

要するに盛夏以後、干ばつの気味の年にはマツタケが不作となり、値が高くなると見てよい。

(成蹊大学)

## 食品としてのきのこ



吉松藤子

### まえがき

きのこは温暖で雨の多い土地に好んで生えるのでわが国はその立地条件を備えているといえる。大体千五百種位のきのこが生え、そのうち約三百種が食用にされている。特に春から秋にかけて林の中の土地や木に多く生え今日では人工栽培も盛んになってきた。季節の上からは秋が最も多く、きのこは日本の秋の味覚を代表する食品といえる。

きのこ類は大形の菌類の俗称で、繁殖のために作る胞子のでき方によって担子菌類の子のう菌類とにわけられるが、大部分は担子菌類に属している。

### きのこの種類

きのこは食用きのこ、薬用きのこ、毒きのこに大別される。食用きのこは天然にしかとれないものと栽培のできるも

のとある。野生きのこの中にはマツタケ、ハツタケ、シメジ、シウロなどがあり、これらのきのこは生きた樹木の根に寄生して生活し培養が難しくまだ人工栽培はできない。それにひきかえシイタケ、ナメコ、エノキタケ、マツシユルム、ヒラタケなどは栽培可能でその生産量は消費の拡大に伴って年々伸長し農山林経済発展の大きい担い手となっている。昭和五十二年に東京都中央卸売市場における生シイタケの入荷量は一〇一〇三、三二三キロで金額にして約九一億九一四五万円に及ぶ。なお俗称はんしめじといって市販されているきのこはシロタモギタケのことである。

### きのこの形態

きのこといえば先ずマツタケ、シイタケのような傘状のものが頭に浮かんでくるがいろいろな形のものがある。玉のよ



うに丸い形をしたものにシヨウロ、トリュフがあり、耳のような形をしたキクラゲ、サンゴのような形をしたホウキタケ、レースのような網状の傘をつけたキヌガサタケなどがある。また中国には冬虫夏草（夏草冬虫、虫草）ドオンチオンシャツアオという珍らしいきのこがある。これは鱗翅類、鞘翅類などの幼虫に菌が寄生し幼虫を宿主として夏に菌が成長するので宿主の種類、菌の種類によってそれぞれ特有の形をしている。夏になるときのこができるがこれを草と考え、その根本には虫の死がいがあるので中国の人はこのような名前をつけたのであろう。丸い形をしたトリュフは子のう菌類の一種であるが南ヨーロッパ特にフランスのベルクール地方にできるきのこである。雑木林に生える黒い色をしたきのこで大きさはくるみ大からじゃがいもくらいの大きさのものまであって香が高い。しかしこのきのこは土の中に埋っているので地面を見ただけではどこに在るのかわからない。そこで訓練した犬や豚を使って地表を嗅がせて見付けるという方法をとっている。非常に高価なもので缶詰にしたものはわが国にも輸入されている。

### きのこの成分

きのこのおもな成分は次のようである。

たん白質	一・五～四・〇%	脂質	〇・二～〇・四%
糖 質	三・〇～六・〇%	灰分	〇・四～〇・八%

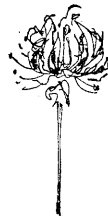
この他ビタミンはB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>が多く含まれている。

また、きのこ類にはビタミンDの母体であるエルゴステリンが多量に含まれている。この他呈味成分としてはグリタミン酸や、グアニル酸などの旨味成分、トレハロース、マンニツト等の甘味成分を含む。また特有の芳香と歯ざわりを持っている。精進料理のだし汁の材料にシイタケが用いられたり、西洋料理でソースにマッシュルームがよく用いられたりするのはその旨味成分によるものである。

きのこの薬効についてであるが昔から薬用きのこのこといわれるものにエブリコ（乾燥したものにアガリチンが含まれ健胃薬や下痢止に用いられる）、オニフスベ（乾燥させ、止血剤として外用したり、吐血、咯血に内服する）、ブクリョウ（乾燥したものは利尿剤として珍重される）などがある。この他最近の研究ではシイタケには血中コレステロールを下げる特質や抗ガン性物質、抗ウイルス性物質を含んでいることが明らかにされ健康食品としての効用が明らかにされつつある。きのこに興味のある方には桐生市に在る国際きのこ会館の見学をおすすめしたい。

（お茶の水女子大学）

# 子どもの秋



佐藤 敏 英

東北の夏は短い。夏が過ぎると、間もなく秋はかけ足でやって来る。秋は、造化が与えてくれた子たちへの贈り物。子どもの秋、楽しい秋、そして、遊びの宝庫の秋……。

今日もすがすがしい秋の朝。むんむんした暑さもどこへやら、さわやかな空気が園舎を包んでいる。ぬけるように澄みきった、高く青い空、日本晴れの南の空に、すでに雪を頂いた鳥海が、くっきりと姿を現わし、微笑んでいる。

朝七時半、登園一番のり、三三五姿を見せる子どもたち。園生活が楽しくて、じっとしてられない子ども達の一群である。園のどこに魅かれるのだろう。園のすぐそこ、隣

り合わせの林、丘、山、それが格好の遊び場、そこに冒険心をそそる秋の山が待っているからであろうか。いよいよ、子どもの秋の一日が始まる。出迎えの先生に、明るい朝のあいさつもそこそこに、各自の部屋へと急ぐ。先を争いながら戸外へ……。嬉嬉として飛び廻る朝の自由遊びの時だ。園庭の遊具にとびつく一団、それには目もくれぬ、他の遊び場探検の一群、そして群、群……。子ども集団は、裏山めがけて一目散につっ走る。朝の集いまでは、まだ間がある。子らにとっては魅力の自由空間であり、遊びの秘策をさぐる場なのだ。秘密基地も、そこにはある。しかし、時は残酷にも、山

遊びの子ども達の夢を中断する。「園庭に集まりましょう」と、スピーカーの声。「ジャックと豆の木」を思わせる高い高い松の木に囲まれた広い園庭。スピーカーの流れにのってくり広げられる元気な朝の体操、二百余名の子ども達の手と足が踊る。裸ン坊、裸足っ子が目につく。バスタオルを手にした子も……。乾布摩擦を終えた子たちだ。続いて、デブ、チビ、ノッポの林のかけっこの始まり。朝の空気に溶け込む快いメロディーが、子どもたちの後を追う。一群、そしてまた一群、木の間がくれのかくれんぼ。

さて、子どもの好きなわが園の、子どもの国裏山とは、一体どんなところなのか、ここに紹介してみよう。（広さ、五、八ヘクタール、松の木が主、樹齢九〇年、約三千本、大きなものは径八〇センチメートル、高さ二六メートルのものもある。適度に間伐され、山はだは整備されている。緩急自在、斜面も様々で絵本「グルンバの幼稚園」のすべり台にも似て、多く利用される。時には、給食時の青空食堂（野外給食）、そして、おにぎりの日の集いの場にもなる。（本園では月一、二度、お母さんの愛情おにぎりを実施）まさに、自然の恵みの林間園だ。四季折々、園舎内の保育と、林間保育がミックスされ、特に秋は、林間保育が多い。草の実、木の実（どんぐ

り、松ぼっくり）落ち葉集め、茸狩り、等々、子ども発想の遊び、探險ごっこ、子どもが主人公の、子ども天国、子どもの世界がそこに展開される。

### 茸狩りの一断面

「先生、きのこの顔みたよ」「どんな顔」「灰色してて、やつけ、（柔かい）ような、堅いような……。ジッとにらめで（睨んで）気味悪いの……」「そのきのこならボク知ってるよ。おじいちゃんになるとタバコ吹くよ」（注 ほこり茸、きつねの茶袋とも言う。成長すると茶褐色になり、踏みつけると茶色の胞子が粉のように飛び散る）こうして、精一ぱいの一日を終え、子どもたちは午後一時すぎ、園にさよならをする。子どもたちよ、大きな夢をもて!! そして、たくましく大らかに育つようにと念じながら一日の仕事を終える。

注 園の周囲の樹木Ⅱ山桜、楓、紅葉、紫式部、栗、檜、柏、あけび、樺、藤、はぜ、やぶこうじ、うるし等  
茸類Ⅱあみたけ、はつたけ、紫しめじ、あぶらしめじ、ぬめりたけ、てんぐたけ、紅てんぐ、むささきなきなた、おにぐち、ほこりたけ

（秋田県・西目幼稚園）

# シヨウロ・しゅうろ・松露

村田修子

「きのこ」と自分のかかわりを振り返って考えてみたとき、  
とっさに何も浮かんでこないほどふれ合いは少ない。

山には縁の少ない関東平野の、しかも海に近い土地で育った私にそうなのか、とも思うけれども、本屋の店頭にある、他の種類の図鑑などに比べると非常にその数の少ないことや、周囲のひとたちの話し振りなどからしても、いちがいに私だけのことではないらしいことは感じられる。だから関西で育った義兄から聞いた、“山を買って松たけ狩りをする”なんていう話は、どう思いをめぐらしてみてもついてはいけない。あの香気ぶんぶんの貴重品的な存在の松たけがによきによき立っているのを実際に見たり引き抜く、という経験が

ないので、想像することはできても、実際の感覚として思い出すことはできないからだ。

「きのこ」についての特集をする、ということでした。話合っていたとき、「二、三年前に園の山道に生えたきのこを子どもたちが見つけたくらいね……」という雑談から、それを書くように、ということになってきたのだが、それとても、生えていたきのこをお箸ではさみ、ビニール袋の中にまたたく間に入れて得意そうに、また気味悪そうに皆にみせて歩いていった一日が過ぎると、毎日のようにその遊びができるほどのきのこのほうも続いて生えてくれなかったため、それで終りになってしまい、そのとき図鑑を見ても、実物と、平面的な図や写

真との適合ができず、今だに名前も分らぬまま、になってしまっているのだが、そのとき毒きのこだとか、そうではないとかクラス中で大きわざして山をかけおりたり、ビニールの袋をわり箸を、と要求してかけ上ったりした感じを忘れないでいるらしく、今でもその山の道を通るとき「ここにきのこがたくさんあってとったね」というひとがいる。

去年、秋田の友だちがつとめている幼稚園の、庭つづきの山で、本当にきのこらしい形をした食用にできるものを教えてもらってとったが、そのとき草や木を分け、その根もとなどを目を皿のようにして探してとる喜びという経験は都会の子どもには望めないことを、前に大きわざしたことと比べてみて大変残念に思った。

こうして「きのこ」のことを考えているうちに、私は大変な経験を持っていることを思い出した。

「きのこ」というとかさがあって、足（？）があつて……と、その形ばかり考えてしまっていたけれど、私が小さいとき住んでいた町からもう少し海辺近くの郊外にいくと、松林がたくさんにあった。それは防風林でもあり、たくさんとれるいわしを干す、ほしかばであった。

春頃だと思うが、植物好きの叔母といつこの男の子と一緒に

によくその松林に松露をとりにつれていつてもらった。

その名の通り松の根もとの土を掘ると、コロリン、と出てくる。そうはいっても掘れば必ず出てくるというほどたくさんあるわけではないので、小さい私たちはいつも退屈して、その周囲に生えているつばなという草の、穂の出るのを集めたりした。今も野にいくとそのつばなが白い穂を出しているのを見掛けることがある。そうすると、またすぐ松露とりの感じがよみがえってくる。一度珍らしく大きな松露が二つついたのを見つけたことがある。そのときのドキッとした感じは今でも思い起すことができる。とって帰った松露は、ごはんに炊き込んで「松露ごはん」となったが、かむとしゃりしゃりという感じで余り好きではなかった。それをよけて味のついたごはんばかりをたべた記憶がある。きっと、大人の味というのだったのだろう。

松露はや 思い出のみの茸となり

松露を知っているひとは少ない。松露はショウロ・しょうろでなく、やっぱり松露がよい。あの松林で砂を掘り起したり、つばなをとったり、ねころんだり、風の音を聞いたり、そんなことを今私の前にいる子どもたちとできたらなあ、と思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

# キノコと生活



曾根田 正己

きのうまで、本当にきのうまで何も生きてなかったのに、遊び場の片隅にキノコが出ている。子供は誰しも不思議に感じ、心をうちふるわすのである。私もそのようなことを経験している。しかし、母親は「毒だからお捨てなさい」といった。いや「バッチイから捨ててしまいなさい」といったのかも知れない。

一般の人がキノコをよく知っている人に対すると、必ず「このキノコは食べられますか」と聞く、決して「このキノコは毒ですか」とは聞かない。それが先程の子供の母親と同一人物であるとなると、自信のない大人の一面と大人の打算

がチラッと感じられるのである。

幼児・児童の多くはキノコを食物としてみるより、単純に不思議で魅力あるものという見方をするようで、決して口へもっていかうとはしないのである。そしてキノコは童話の世界への導入媒体となり、子供の心に詩を醸し出し、夢を大きく膨らませる魔法の生物なのである。

このように大人より子供の方が純粹にキノコと向いあうのであるが、それを「有毒だから」とか「きたないから」とかいう理由で捨てさせるのはまったく意味がない。また若し、心配のように毒について考えるならば、むしろ、よく観察さ

せるべきではなからうか。ことわっておくが、子供が見つけて口に入れる程度の一片のキノコでは中毒などすることはなく、勿論死ぬことなどないのである。

ともかく、キノコについてまったく興味のない人もあるが、興味があっても知識の無い人が多い。それだけでよく、知識を必要とするけれど全然無い人がいることも確かである。

近頃入手した『入門食品衛生学』なる大学の教科書がある。食中毒の項の中でキノコの鑑別法として次のことが挙げられている。

①茎が縦に裂けるものは―である。②色があざやかで美しいものは―である。③悪臭のあるものは―である。④苦味や辛味のあるものは―である。⑤茎につば(下環)のあるものは―である。⑥乳汁を分泌しているもの、粘性の液をだすもの、空気で変色するものは―である。⑦銀さじと煮て黒変したり、曇ったりしたものは―である。

この一線の部分はそれぞれ有毒とか無毒とかが入るのである。またこの個条書きの下には次のようなことが書かれている。「以上は一般的にいわれる鑑別法であるが、例外が多く信頼されるものではない。十分にわかったものを食べ種類

不明のものは食べてはならない」と。

前記の七個条は日本にある古くからの毒キノコ鑑別法の迷信羅列であり、まったく危険極まりないことである。なんとすればこの教科書を使用する教員はおそらくこれを説明し、学生はこれを記憶し、その学生がまた教育として説明すると考えられるからである。また、個条書の下に添え書きをよく読んでみると、上の七個条は何の為に書かれたものか、まったくわからず、このような教科書こそ有毒であると鑑定するものである。

### キノコの呼び名について

キノコは茸、菌、蕈と書き、近頃一般に使用される「木の子」は当て字である。鮮や鰯を寿司と書くのと同じである。「季の子」や「季のこ」と考えても不自然とはいえない。これは季節節に出る小さいもの、または季節にのこのこ(擬態語)でてくるものという意味である。信州ではイグチ属などのキノコをジゴボウと呼ぶ、これは時候に出てくる坊主(子供)という意味であり、さきの発想とまったく一致している。この他キノコという汎称に対して各地で方言・俚言がある。

“なば” “もたせ” “こけ” “みみ” “たけ” “くさびら” がこれである。

## なば

“なば” は九州、南四国など大変広い言語域をもち、八重山諸島ではナーバと発音する。滑生と書く、大言海によると粘質とか膠質とかを表わす言葉とあるが明瞭ではない。筆者は“なま”（生のこと）の転音であり、魚のように腐りやすいのでこの名があるとしているが賛成者はあまり多くはない。

## もたせ

“もたせ” は “もたし” ともいう。東北、北関東、北陸などの一部で使われる俚言である。子音で終ることと言語域が北にかたよることからアイヌ語と関係ありという説があるがなんの証拠もない。原義は木にもたれるとか木にもたせかかるとする人が多く、筆者も過去においてそのように書いて来たのであるが、ここで新説を提案したいと思う。“もたせ” という言葉はそのまま現代用語として使用されているからである。“おもたせ” と丁寧語にするとわかると思うが、手土産を意味する。勿論これは神からの “もたせ” ということ

であり、筆者としては雷（神鳴り）からの “もたせ” として考えたい。わが国では古来、雷を擬人的に考えていたこと、雷が立木に傷口をつくること、キノコは木の傷口などによく発生することなどを考えあわせると、木にもたれて出るという説より、筆者の新提案のほうが、より自然ではなからうかと思っている。

中国に雷丸<sup>らいぐわん</sup>というキノコがある。雷が落ちて地下に入り、丸となり、それよりキノコが出ると考えている。まさに雷のもたせである。この菌は竹林に発生、一センチないし一センチ五ミリ、赤褐色で堅い粒（菌核という）をつくり、その粒よりひだのある子実体（キノコ）を発生するという。この雷丸は秘薬として珍重され、わが国には奈良朝の時、あの鑑真大和上によってもたらされた。その数十粒は今もなお正倉院薬物として保持されている。

## こけ

“こけ” は富山県、石川県や岐阜県の一部の地域に使われている。木毛と書く。ゼニゴケやスギゴケの蘚苔類とまったく同音である。しかし、この地方の人達は同名異物になんの抵抗も感じないようである。民芸品にこけしがあるが、形に類



似性があり、この二つは共通語源をもつものと考えられる。

## み み

“みみ”は佐渡や石川県などで使われている。茸を誤読した説、木耳（キクラゲ）からきたという説、ヒトや動物の耳と形態や感触が似ているからという説などあり明瞭ではない。

## た け

“たけ”は現代用語であると同時に古語である。茸、菌、蕈が当てられる。竹と同音であり、活力のあふれるさまを表わす“たける”および“たけり”の名詞形である——というのが一致した意見である。ただこの“たけ”の意の中にはたぶんに性的な意味が含まれていると考えてよい。

神話の中に天鈿女命あめのすめのみことが天岩屋戸の変で舞を舞って天照大神を慰めまいらせる話があるが、この時“たけ”を持って踊られたと伝えられている。後世、この時の女神を象徴したといわれるオカメの面をもって踊る神楽が笹竹を持つてする習なま慣なとなっている。この天岩屋戸の前での踊りによって神々が爆笑されるというのであるが、笹竹では面白くもおかしくもないのである。肌をあらわにしてキノコを打ち振って踊った

であろうと想像するのは間違ひであろうか。

## くさびら

“くさびら”はキノコの古語である。“たけ”と同様に、菌、茸、蕈の漢字が当てられる。また蔬とも草片、さらには久佐比良、久佐非良なども書く。くさびらは“くさ”と“ひら”の複合語である。くさは艸で地面から生え立つという意味で木ほど大きくないものを指す。ひらは薄くて平たいものを意味する。

源順（九一一―九八三）の作といわれる宇津保物語・菊の宴うなげの中に「透箱すきばこ四つにひら杯据はらゑて、紅葉折り敷きて、松の小菓物盛りて、菌きのこなどして、をばな色の強飯きんぱんなど参るほどに、雁鳴き渡る」これはまさしく、秋の野における宴の情景である。「菌などして」は矢張り「くさびらなどして」と読むのである。そしてこの一文によって、キノコなどによって色を着けた強飯があつたことがわかる。同じく宇津保物語の「国ゆづりの下」には次のような件くだりがある。「御前の朽木くもぎに生いたるくさらびらども、あつゐものにせさせ、にがたけなど調じて、白銀の金鏡かみきように入れつつまゐれば、君たち興じつつ、召し添へつつまゐる」これは椎茸のような枯木から出たキノ

コを煮物とし、ニガタケ（苦菌）を入れて調理したと解釈でき、キノコを“くさびら”といい、同時に“たけ”と呼んだことがわかる。また食習慣なども窺え興味深い。

大蔵流、和泉流の能狂言に“くさびら”がある。昔とも菌とも書く。「おとこ、まかり出でたるものは、このあたりに住いたすものでござる。この間、某が庭前へ、ときならぬ“くさびら”が出まいたによって取捨ててござれば、一夜のうちに、またものとごとくあがります。それより、再三取り捨てますれども、おいおい大きゅうなつてあがりまするによってなにやら心にかかって悪しゅうござる。それにつきここにお目にかけてせらるるお先達がござるによって、参つて占うてもらい、また加持を頼もうと存ずる」という口上からはじまる狂言である。山伏、おとこくさびらの十二名が登場する。ときならぬ季節に庭に出てきたくさびら（キノコ）を再三つみとったが、後から次々と大きいのが出てきて気味が悪くなる。そこで山伏に祈禱を頼む、山伏法印が来て、これは天狗のしわざといひ呪文を唱えと消えてしまふ。山伏が得意になったのもつかの間、またもや“くさびら”がいっぱんに生えてきたので山伏は立腹したり、祈つたりする。結局、ききめがなく、棒を振り上げ大格闘、しかし、次々に生

える“くさびら”に負け「ゆるいてくれ、ゆるいてくれ」と逃げ出すという筋書である。

まことにユーモアたっぷりのものである。また、山伏をひどくやつつける為に「鬼茸」が出てきたり、キノコが山伏に対して「取つて喰もう」といわせる新しい台本もあるという。この狂言は江戸初期に演じられたものらしく、キノコへの不思議さと奇妙さのイメージがあますとこなく表現されたものといえる。（山伏は例の山伏姿、おとこは狂言持、くさびらは一文字笠、びなん帽子などをかぶり、賢徳、囃吹、登髭、乙などの面をつけている）

大津の郊外に菌神社なる社がある。昨年筆者はここを訪れたが、駅前交番はともかく、近所の人でさえもその正式の名前を知らないのに驚いた。この神社の縁起によると田面に落雷があり、その跡にキノコが生えた。その年は豊年であったことから、時の帝であった舒命天皇が勅命を下され創られたという。これは宇津保物語より前の七世紀のことである。この神社は境内が広く、昔日を偲ばせるものがあるが、今は小さい社と近年つくられた舞殿があるだけである。しかし参道の入口の石碑にはたしかに「菌神社」と刻まれている。

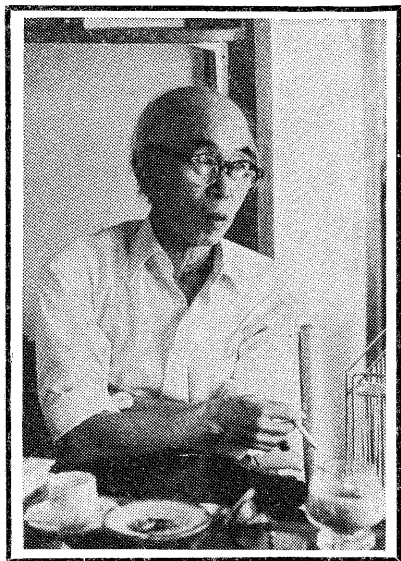
（東京家政大学）

☆講演

## 三つのこと——育児（育ての心）と教育と救い

——教育をほんとうに新鮮な眼差しで見なおしたい——

周 郷 博



〔故周郷博先生の講演テープを送るに当って〕

高 橋 フ ミ

本誌が今は亡き周郷博先生の平幼稚園での二時間にわたる講演のテープを原稿にして下さったことはありがたいことです。

周郷先生のご永眠は私の心に強い衝撃を与え今も痛手になっています。とても淋しいのです。

ことしの三月末に野辺山で津守先生にお目にかかりました。こらえきれない淋しさをつい津守先生にもらしました。駅の待合室の数分間でしたが津守先生が周郷先生の死を悼み惜しまれるお言葉で慰められていました。その時にこのテープを世に出すことを津守先生が勧めて下さいました。平幼稚園のPTAも手もとに死蔵されてしまうことがないことを感謝しています。

昨秋十一月に東北の小さい幼稚園に周郷先生は来て下さいました。著書でだけお慕いしていた私の長い歳月の念願が叶えられたのです。先生の教え子中島弘子先生（彰栄保育専門学校講師）の仲介でした。中島先生は周郷先生の詩「くもさん」に大中恩先生が作曲した楽譜を私に下さって講演会場で周郷先生に唱って上げることを提案されました。なんとというやさしい、周郷先生の教え子らしい教育者なのだろうと私は思いました。講演の前にPTAの全員が練習して楽しく唱いました。周郷先生は忘れていた遠い昔を思い出したと言われて驚きと喜びをかくせないという表情をなさいました。

平駅で出迎えるの目印に私が赤い大きい紙袋を下げて立っていることを約束しました。特急グリーン車から降りてくる多くの男性の群を目でかきわけながら写真で知っているお顔をさがしました。背のすらりとした気品高い老紳士を心に描いて。

突如「高橋さんかね」と私の目の前で声がして、私の目よりも少し低いところで鋭い瞳が私を見据えていました。土のついた白ズック靴、肩からふら下げた重そうな古びた鞆は浮世離れしていました。

「電話の声と手紙から美人だろうなんて思わなかったがきつといい人だろうと思ったよ」

これが先生の私への初対面のあいさつでした。私は全身の緊張が一举にはぐれ心が安らかになりました。

「幼児教育」を「人間とは何か」というところから模索し、悲しみ、淋しみ、感動しておられる先生の心がひたひたと波打って私の心に伝ってきたその人、読むごとに私の心が震えたあの本、この本の著者、想像していた姿とは全く異った先生の風貌に出会って、こんどは喜びで心が震えました。

先生は幼な子を現実的によく知っておられたように思います。心理学も哲学も自然界のこともそれは野山の草木の名を憶えることまで幼な子を解ろうとする心、人間を知ろうとする努力からその学問が語られ知識が伝達されていいたように思います。私はその愛に打たれるのです。

お帰りの列車を待つ間のプラットホームで、

「いなかにはまだマリヤ様のような美しい顔の母親がいるね」

と言われました。これが私の耳に残っている周郷先生の地上最後のお言葉です。

(彰栄保育専門学校・平幼稚園)

◇ ◇ ◇

この講演は、今は亡き周郷先生が昨年（一九七九年）十一月七日に、いわき市の平幼稚園でされたものです。園長高橋フミ先生は非常に周郷先生を尊敬されており、また周郷先生もこの時、とても気持ちよく話ができたと思われ、次回を約束されていたそうです。本題に入る前に高橋先生から講演の依頼をお受けになったいきさつを話され、

“高橋フミなんて名前は、平凡で良いですね。あんまりなんか、美人であるような名前がついてると工合悪いね”

といかにも周郷先生らしい語り口の中に高橋先生とのかかわり方を、淡々と話されています。

(赤間)

ぼくは九月に外国から帰ってきて、三十九度四分も熱を出しました。病気で五十日ぐらいは家を出られませんでした。今日は、遠出をしてきて二度目です。そこでまずいいことは、高橋さんとぼくと、ここに集まっている皆さんとは、何か頭の理屈では説明できない縁みたいなのがつながっているな、という風に感じて

います。血のつながりじゃなくて、縁みたいなの、ありますね。日本人の中だけでなくてもあるんです。でも、縁というのは、ただ縁があっただけじゃだめです。縁を利用してうまく成功しようなんて思ったってだめね、よくわからない説明のつかないものだけれども、何か意味があって、それによってこちらもむこうも、それが踏み台でもっと高い所に精神的に昇れるみたいなものが縁だと思います。ぼくは病気で経験しましたけれど、精神的なもので人間が高まると、体も良くなることはたしかです。ここは非常に重要な問題です。精神は精神だ、知性は知性だ、体は体で別だなんて考えてるけれども、それは違います。心に何か喜びがおこってくると、それも自分の欲にからだ喜びじゃないんですよ、宝くじが当たったなんていうのじゃなくて、損得利害をこえた魂の喜びがおこってくると、体の調子がよくなります。薬はある助けにはなりますけれど、本質的なものは魂に喜びがあるというところで、それで体のずから体が元気になるということだと思います。

初めからむずかしいことをいいましたが、普通の言葉でいえば“ここからだ”“ここらと物の世界”の関係ということですよ。“mind and matter”心と物との関係です。“こんな話むずかしくて、聞いたようなふりしてる方がいいかな”なんて、思わな

いでほしいな。(笑い)

ぼく、この夏ヨーロッパへ行つた時、胸の中にひとつの問題を持って行つてました。それは女性の問題ですが、これは世界中に非常に大きな問題をもっています。というのは、女性が昔と変わってききましたね、「ウーマンリブ」、昔よりも女の人が楽になつてついでに解放してもらいたいとか、「翔んでる女」とかいろいろでてきました。世の中がどんどん変わつて家庭の生活も変わる、家族はだんなさんと子どもが一人か二人、昔とえらく違うわけです。そして女が職業をもつということもあります。女が大学へ行くようになって、大学へ行かなくても女を相手にした本がいっぱいあります。そして大抵の本は女を甘やかすことを書いてます。そうしなきゃ売れないから……と、つiiiい気になりますね。そういうことが一種の教育なんです。それで何か、少し本を読んだり大学へ行つて勉強したりすると、物がわかつたような気がしてくるのね。少なくとも昔の日本の女性のような状態ではなくなつて「謙遜さ」みたいなものがへつてきます。文字や知識として知つたことは、その役に立たないものです。だけど自分では少し偉くなつたような気になるのね。しかしそれは邪魔物で、ちつとも役に立たないことなのです。

さつき園長室に行きましたら「神は愛なり」という額がかかっ

ていました。この言葉、むずかしいですね。わかりますか？ 神は愛だから何でも許してもらえ、神さまは甘やかしてくれませんか？ この言葉もわかつた気になっちゃいけないの、あれは大変なことなんだから。この言葉一つ覚えてわかつたような気がしてゐるんだつたら、その人は不幸な人です。わかりますか？ これ。

いま世界じゆうで、社会主義の国でも、アメリカやヨーロッパのような資本主義の国でも、女性の問題、それから学校の教育より家庭の問題がとりあげられています。家庭の母親の生き方というか振舞いというか、女性たちの眼差し、顔のことで。顔は化粧すればいいものじゃないんです。資生堂が作ってくれるんじゃないんですよ。昔と違つて今は、だんなさんが帰つてきて仕事に忙しくて疲れてるから相手にしてくれない、そうすると女はひまだから寂しいと思うわけです。昔の女の人はそんなことを考へるひまがなかったの、おまけに男の方はくたびれちゃつて性欲もあんまりないんです。変なこといつてるようだけど、女の人は男ほど性欲が衰えちゃわないんです。するといろんな不満があるわけです。それから、だんなさんとの関係だけじゃなく子どもからも慕われてないんです。がみがみいうせいだけじゃなくて、母親の顔つきが昔のお母さんと違つてきちゃつたの。いつも子どもの方ばかり見てるから、子どももいやでしょ？ 監視されてるみ

たいで。そして、近所でもお母さん同士が仲よくないですね。なんかお互いに本心を言わないで口だけでうまいこといつてるの。すると女同士も、良い友人と一緒に話すという喜びがないもんだから寂しいんです、そして子どもに「もっと勉強しなさい」「これじゃ東大へ入れないじゃないの」とかいうことになります。それじゃ子どもを手段にしているようなものです。そこへつけこんで化粧品やが女の人にいろいろ買わせて塗らたくったもんだから、女の顔が目茶苦茶になっちゃいました。

一方では変な学校教育というのがある、東大へ入らないといけないみたいな、欲でつぶった奴がもみあつてるような、点数かせぎばかりやって日本の子どもと母親の心を目茶苦茶にしちゃいました。だから化粧品をなるべく買わないで下さい。だまされないように。それから、学校の成績や何かにだまされていきり立つのもおやめなさい。この幼稚園は良い幼稚園だけれど、最近の幼稚園もまたよくありません。幼稚園の先生の中でも年とった人たちが若い人たちに意地悪をすることがあります。それと、これは男にもありますが、女がある年齢になると先入観ができちゃって「おやっ」と驚くべきことを聞いてもすばらしい！これはそうだ、私の足りないところだなと気が付かなくなるんです。それと、知識ということがあります。知識があると、私は知ってい

るということ、本当に聞くべきことを聞かなくなっちゃうの。本当は偉い人から聞くよりも、偉くない人がいいことをいつてるんです。子どもなんかでもいいことをいつてるの。それが聞けるっていうのは、先入観や知識があるとだめなんです。子どもは時にびっくりするようなことを言うでしょ？親が批判されていると思うようなことを。だけど、あれは子どもなんだなと思って軽べつしようとするからいけないんです。先入観と知識があるのは当然で、勉強するのでもいいことだけれど、自分の狭い知識、自分がつまっている先入観で、自分を故意に進んで狭いものにしてしまふ必要はないですね。

パリで、フランクフルトから来たヨハネスという三十ちょっとすぎの男に会いました。ヨハネスは服部孝子さんというぼくの教え子と結婚して、孝子さんが乳がんで死んでからフランクフルトに帰って一人でいるんです。ぼくは彼のことを心配なのでパリへよんで話をしました。その時の話で、ドイツでも家庭が昔と変わってきたそうです。ただ日本と違うのは、ドイツの男たちが日本の男たちみたいに甘くないことです。日本の男は女がいないと夜も日も明けないといったところがありますね。そしてお父さんも日本のお父さんみたいにフィヤフィヤじゃなく、キチンとしています。ドイツにはこのごろ、女だけのかけこみ寺、女だけがいる

場所があるそうです。日本の男は、そうなぐるといふことをしません、ドイツの男はそうじゃないんです。そしてこのごろ、ドイツの男はドイツの女が変わってきたんだから、いやになつて、どこかよその国の女と結婚したいと思つてゐるそうです。日本の男はそれほどじゃないですね。

この本は、コロンビア大学のウエイマンさんの奥さん、英子さんが送つてきてくれた本ですけれど、アメリカでもずい分ひどい問題がおこつてゐるようです。世界中、女というものがどんどん變つて、これから先またどう変わるべきかということが問題です。そしてこの變わり方が中途半端な變りかけの状態、世の中が變つちやつたから變つたという受身の状態です。翔んでる女といつても、桐島洋子ぐらゐになるとちよつと魅力があるんですけれど、大抵はいい加減に翔んでいて、翔んだふりをしているんです。教育というのは、初期はお母さんと家庭で行われているわけですから、そこでお母さんが變な方向に變つちやうと（それも世の中の流れに流されて受身で變つていくと）子どもはまともにその影響をうけます。お母さんが口で子どもに言うことよりも、心で思つてゐることの方が子どもに影響を与えます。口でどんなにうまいこと言つても、子どもは動物のようにちゃんと見て、感じとつてゐます。心で思つてゐるだけのことがわかるとい

う、ここが非常に重要なことです。それでしかも悲慘なことは、アメリカでもイギリスでも、子どもを虐待してゐる母親がかなり多いんです。この本の著者が知つてゐる人のことだそうですが、ニューヨーク郊外でかなり良い暮らしをしてゐる家庭で、三歳か四歳の子どもの首を、お母さんがちよん切つちやつたの。それぐらゐ、女の人が何か神経の病氣にかかつていらゐるというこゝとも世界的な現象です。それと子どもの自殺、これは日本も多いけれど、社会主義國、フランス、デンマークなどでも多いです。なぜ自殺をするんでしょう。

去年NHKで、日本体育大学の正木君たちが「子どもの体はむしろ生まれてゐる」ということを放送しましたね。何か子どもが妊娠中からすでに起こつてゐるかもしれないんだけど——本能が弱つてゐるそうです。本能というのは生命力のことです。その調査によると、子どもの足が弱くなつたこともたしかです。足がちやんと使われないで弱つてきちやうと、頭の働きの弾力がなくなるの、だからぼくは坐つて話をするのは大きらいなんです。坐つちやうとぼくの話も坐つちやうんです。ぼくが立つてゐる姿勢がぼくの頭の働きの關係があつて、腰がシャンとしてなかつたらぼくのいつてゐることはいい加減です。もう一つは、足が弱つて



くると心臓も弱ってくるということです。ぼくは心臓は悪いんだけれども、蟲の仕事をやったり歩いたりして足や手先を使っています。あまりやりすぎてもいけません、使わないとぼくの心臓はもっと弱くなります。こういう体の問題が、育児、子どもを一人の子どもに育てる毎日の仕事の中で本当に見直されることが、もっとよく考えられなければいけません。

正木君たちはNHKと相談して、日本中の養護教室の子どもの体がおかしところは、どういう風におかしくなっているかということをも四人ぐらいの養護教師から聞いたところから発展してきたということです。最初に話した「こころと物」ということで、体は物の世界の中にあります。自然や川、宇宙も、星の世界も物です。それらの物と心との関係ということです。正木君がそれと要約していますけれど、ともかく高度経済成長で非常に便利になって、食物は昔のようにあり合せの物を大事に食べるというよりも、やたらにどこから買ってきておいしい物を食べるようになりましたね。着る物だって。そしてバリなんか行くと子どもははだしで遊んでいます。コンクリートじゃなくて石のところで、石段を上ったりして皆はだしで遊んでるの。ところが日本の子どもはみんな靴はいてるのね。靴下をはいて靴はいてるの。それじゃあ足の指が動きません。足だっちゃんと五本の指があるんです

よ。特に親指とくすり指にあたる指、崖なんか上る時はサルミたいに指先まで力を入れるから心臓が丈夫になるんです。

それから、小学生たちは背中がグニャッとしてて姿勢がよくないそうです。腰を境にして足がちゃんと立ってて、しゃんとしてるということは背骨がすつとしてるということです。背骨の中に脊ずい、神経が入ってて体じゅうずつといってるんですから、背中がグニャッとしてて脳だけが良いなんてことはないんです。その人の人柄は、その人が立っている時の姿勢と関係があります。グニャグニャッとした人はやっぱりグニャグニャッとしてます。この調査では、小学校では背中がグニャ、中学校になると朝礼の時にバタンと例れる生徒が出てくる、高校になると腰痛になる“そうです。それから、ころんだ時にも手をつかないということです。ネコの方がよっぽど立派です。これじゃもう、人間として使えないものにならない人間が小さい時からできてしまします。何かごみかとんでも、これは絶対的な反応で眼がパチッとするものなのに、今の子どもは開いたままだから眼に入っちゃうんです。こういうことは教えるものでもありません。子どもが自分の命を守るために神様がくれた本能なんだから、自分できたえていくものです。あんまり手をかけちゃうとそれがだめになります。箸やなんかを使うことだって、子どもは手先を使うということが好き

なんです。それをお母さんは案外やらせないのね。手先っていうのはいたずらもするんです。“なるべくいたずらをしないで勉強しなさい”なんていってできるわけがありません。

ボランスキーという人がポーランドにいて、その人はこういうことをいっています。“体力でも精神的な知力でも早くピークに合ったものは早く落ちてしまう”ぼくは子どもの時からそういう例を知ってるけれど、小学三年生ぐらいで腕っ節が強くてけんかも強いなんていう子がいますね。でも十四、五になったらどうなるだろう、弱いやつになるの。こういう一つの法則があるんです。

物事を考える力、知力、これが早くピークにきて早くからペラペラおしゃべりして物がわかったようなこといつてる点数の良い子ども、それはもう少しするとばかみたいになるの。近ごろのピークは見せかけのピークです。こういうことで覚悟すると、教育というものはずっと深い意味をもってきて、やり甲斐があるようになります。お母さんの顔だつてよくなります。変ないらだった欲心を切ることなんだから。アインシュタインなんかも無口で、親は馬鹿だと思ったそうです。子どもが無口であるということは考え深いということなんです。そうでない場合もあるけれど(笑い)そこをちゃんと見分けなきゃいけないの。子どもは生れてきて大

人を見ると、子どもは真面目に見えますからもうしゃべれなくなるの。よく考えてからあとでいおうと思つてだまつてる。それを早く言えなんていつちやいけない。それを、わからなくてもべらべら言っちゃうような子どもにしちゃうと、宝物をこわしちゃうようなものです。考える力があるのに。昔の日本人は、中国でも言われていますが、大器晩成という言葉で全体をキャッチしています。そういうことの中味をボランスキーなどが研究しているのです。

もう一つ、今の学校制度っていうものは自民党と同じようにもうだめなんです。今の学校は、子どもを少なくとも受身の立場にしています。勉強しなさい、子どもはいじめられてるんです。勉強は、遊んだり竹とんぼを作ったりするのと同じに自分でやることです。やらないとまともな人間にならないとか、世の中から爪はじきになるという脅迫で勉強すること、勉強ですか？ そういう意味では今は、恋愛さえもできないようにしています。人を愛するというのは簡単にはできないことです。今、テレビで恋愛遊びみたいなものをやっていますが、あれは愛し合ってるのでも何でもありません。受身でそういう遊びをやってるんです。愛するということはえらい決心がいるものです。ぼくは若い時分から、新約聖書の中のイエスさまの“人その友のために命

を捨つる、それは大いなる愛なり”という言葉が好きです。世間でいう愛とちょっと違うでしょう。友情という言葉の方が、いろいろとかかわりあいがあるって、サラッとして汚れがなくて、この友情こそ不安定な頼りになる物のない今の時代に最も重要なものだと思います。

先生が子どもに教えるといっても、どっちが先生なのか、子どもが先生かもしれません。親も先生も、有利な地位を利用して子どもを手段として教育したりしてるわけです。教育というのは、教育する人が上から教えるというようなものじゃなくて、親も先生も子どもと一緒に救われなければならないのです。明日がどうなるかわからない時代に、親も先生もノイローゼや情緒不安定の人がけっこう多いんです。自分のことは棚に上げておいて、お母さんは完全な人間だというような顔をして、子どもを救ってやるなんていう、見えすいた軽薄な態度をとらないことです。学校の先生だって救われていません。俸給が出ていることをいいことにして、私は先生でお前は生徒だなんていつてるけど、どっちが先生でしょうか。お金の奴れいと、まだお金のどれいにならない子どもと、どっちが人間として立派ですか？ 今年の夏、オランダのランゲフェルトさんが日本へ来て話をするはずでしたが、その題は“よるべなき父母”という題でした。父母というものもこ

の時代、よるべになるものをもっていないんです。親も子も、体のまともな人も障害者も一緒に救われなければならない、ということが今の教育の根本の問題です。

次に、アドリエンヌ・リッチさんの本について話します。この人はアメリカの人で未来詩人なんですが、初めてこういう本を書きました。アメリカでも女性と母とがどういう風に生きるかということが重要な問題になっています。昨夜増井光子さんという人がテレビでライオンの話をしましたね。増井さんというのはなかなか面白い人でしょ、サッパリした。上野動物園の獣医さんです。その話によると、ライオンの牡は役に立たないですね。牝がほとんど全部やつてるんです。牝がとってきた餌を牡は食べてるんです。この本を読んだとやはり男っていうのはけっこうなものです。これはヨーロッパから始まるんですけど、父性社会、ギリシャなんていうのは女なんかに問題にしない生活です。この本の題名“Of woman born we everyone of us”あらゆるものは女から生れた。そして女の世話にならなきゃ人間になれなかった。男は戦争なんかしてましたけれど、負傷者なんかは全部女が世話しました。その間に子どもの世話もして、食べる物も一生懸命作りました。男って、何してたんでしょう。この本にも書いてありますけれど、女がやるべきことがもっとはっきりしてくると、人間の

生活は変わってくる。かつて女はそういうことをやっていました。東洋、アジアというのは母性文化です。女、母性というのはいろいろと包みこみ、男はこれを分解してさばくものです。そういうものを総合して包みこむように命というものを育てていくのが母性文化なんです。キリスト教には両方の文化があるように思えますけれど、教会へ入ると左側にまずマリアさんがいるわけです。そこをろうそくがともって、このマリアさんの仲だちをへてイエス様のところへ行かなければならない。じかにイエス様のところへ行っちゃいけないんです。

まずこの本は彼女の一九六〇年の日記から始まっているんですけど、六〇年十一月最初の書き出しは次のようです。

“私の子どもたちは、どうにも逃げ隠れもできない辛い仕事を私のところへもってきた。私はそういう辛い経験というものについて、前もって何の経験もなかった”それから、

“子どもを育てるということは、やり切れない辛さ、神経の内側をえぐられるような『いやだ!』という気持ちと、天から恵んでくれた恵みのような子どものやさしさ、それが交互にゆれ動いているような辛い経験”だと書いています。“それを、娘時代から一人の女性が母になった瞬間にはなお、この辛い経験によって母になっていく”これを楽しなものにするためなんです。この経

験を自分の物にした時に初めて母らしいものが出てくる、と彼女は書いています。そして“女性の中にはまだまだ人類の歴史上、女が発揮できなかった能力があるはずだ、甘やかされて出てこない魅力がある”というのが、彼女のこの本の魅力なんです。

お母さんがこの辛さに耐えていく、この辛い経験の中から女性がもっている非常に良いものが現われてくる、ということがお母さんの喜びであるはずです。ティアル・ド・シャルダンのパンセの中にでてる“永遠というものがある。今日明日のことだけではない”という、何か信じ得るものとぶつかるのだと思います。

そしてお母さんや家庭のふん囲気が変われば子どもは変わってきます。そういうことが今、世界じゅう、社会主義国も資本主義国も含めて大きな問題になってきています。制度化された学校というのは、権力者の都合によってできるものですが、親子関係、家族が友情で結ばれているということは、永遠の相をおびています。学校制度などという一時的なものと永遠的なものをちゃんと見分けて、覚悟をして教育に接していくことが大切です。

のら猫が去年家の物置きで赤ん坊を生みました。母猫が病気になるって、生れた子どもがみんな眼が開かなくて、医者頼んだら七千円ぐらいとられました。三四のうち二匹は、子どもがよく遊

びに来る芝生の所へおいておいたら誰かもって行ってくれましたが、のら猫はみんな人相が悪いですね。一匹はうちの隣の女の子がほしいといって、隣で飼われています。白と黒のまだらで、サブという名前で育てられています。母親の方もら猫だから何となく可愛げがないです。何かこう縁の下にもぐって、眼だけこっちを見てるといふような、にくらしいのね。でも一度うちで遠くへおいてきたけど帰ってきちゃったので、諦めて何かうちで食べさせています。そしてほくだけだとガラス戸のそばまでくるの。男の方が甘いと思ってるらしい。(笑い)隣へ行った子どものサブも家へしばしば遊びに来ます。でもこの二匹を見ると、子どもの時可愛がられなかったのと、可愛がられるのでこんなに違うかと思えます。猫の親子を見てると人間のことがよくわかります。このごろは母親の方も甘えたいらしくて、夕飯なんか食べてるとよって来ます。でもちょっとでも音がするとすぐ縁側の下へ入ってしまう。サブは全然そんなことはないし、遊ぶことが上手です。若いせいもあるでしょう。動物行動学から人間を見るということは大変面白いですけれど、ぼくが最近読んで面白かったのは、グリシンという人の書いた「動物に心があるか」という本です。ロックフェラー大学の人ですが非常に面白い本です。ノーベル賞をもらったロレンツという人もいますが、動物の

方から人間を見ると人間のことがとてもよくわかります。

それで、うちの三毛とサブの行動の違いを見ても、簡単にいえば、あとまで可愛がられなくてもいいけれど、小さい時に可愛がられた、生れてきた初期に、生きるといふことを信じられるという心をもったのと、それもちそになったのではえらい違いがあるといふことを、教えられる気がします。小さい時、学校へ入ったらもうだめです。そのころに、大事なこと、つまり生命の方向、ヨーロッパの人は方向トヌスといえます。生命のはりの深さトヌスです。生きる力の弾力、そして回りを疑っていない、ちゃんとした判断ができる。小さい時には、何の意識もなく子どもはそれを感じるものです。うちの猫の行動を見てつくづく考えたことですが、もう時間になりましたので終りにします。



# 私たちの保育

## ―園全体でとりくむ保育―

大橋利恵子

朝、急いで保育室に飛び込むと、もう何人かの子どもが、スモックに着がえたり、タオルをかけたたりしている。「おはよう」のあいさつをすると、待っていましたとばかりに、「先生、ブロックしていい?」「外に遊びに行ってくるよ」等々と自分の遊びを始める子ども達である。しかし、全員がこのように飛び出していつてくれるわけではない。自分のロッカーの所でじっと立っている子も居れば、教師のそばから離れられない子も居る。ひととおり、あいさつや朝の準備がすんだところで、何とかこの子達が遊べるように声をかけたり、手をつないだり、おもしろそうな遊びに一緒に入ったりしてみる。そうしている間にも、「先生、この箱で何か作りたい」「先生、ごはんできましたよ」「先生、これスタージン

ガーの○○○だよ」等々、様々に話しかけられたり、頼まれたりする。ひとつひとつ、ていねいに受けとめたい。心ではいつもそう思っているのに、実際には、半分以上の応答が「あら、そう」「どうぞ」「あとでね」「いいわね」等々だけの実にそっけない返事になってしまうのである。一日の保育を終えて、ふと「今日は何をしていたのかしら」と自問してしまふ事もあるぐらい、教師は何かと忙しい。その上、今日は是非、この活動を……と決めている日などは、そこに集まってきた子ども達と遊ぶので手いっぱいになってしまふ。四十人という多人数をかかえて、私の毎日の保育は後悔することだらけなのである。

一人の教師が一日の保育時間の中で出来ることの何と少ないことか。何とかもつと、子どものやりたいことに適切に応じてやれないだろうか。そんな気持は私一人ではなく、となりのクラスの先生も同じであった。そこで同じ活動をやりたいう子は、クラスにこだわらずに一緒にできるようにして、無駄をばぶこうという話がちあがった。例えば、絵具で絵を描きたい子が両クラスに居て、両方で絵具の準備をしているより、こちらのクラスで準備したら、どちらの子どもも、絵の描きたい子は集まってやれるようにし、他方のクラスの教師は、その他の活動に参加するなり、援助するなりしたほうが、より多くの子どもの要求に応じられるのではないかと考えたわけである。

このような話しあいから、教師間で分担しあって保育する話がまとまった。当時はまだ自由保育に切り替えたばかりだったので、クラス全体で活動することも多く、子ども達も自分のクラスで遊ぶのがあたりまえだった。従って、まず、他クラスの教師にも親しめるよう、鬼ごっこ、フォークダンス、帰りの会等と一緒にする等して慣れていた。最初はなかなかとなりのクラスの部屋に入っていけなかった子ども達も、少しずつ、教師に誘われたり、友だちに連れられたりし

て、どちらのクラスでも遊べるようになってきた。

このような活動を始めたのが四年前、その次の年には、学年単位で分担したり、四歳児五歳児をまぜて行なってみたりした。そして一昨年から、このような活動をさらに広げ、全園の活動として取りこんでみた。まず、教師間で子どもの遊びの様子について話しあい、現在どのような活動を準備したら、子ども達はより楽しく、よりダイナミックに、そして、より充実してじっくりと遊べるだろうか、その遊びをどのようにに環境設定しておけばよいだろうか等々、全員の教師でゆつくりと話しあう。これが、この形態の保育の第一歩、土台となる大切な話しあいである。

当日、教師は自分のクラスの子の受け入れをすませると、朝から分担した活動の準備を始める。やりたくて参加してくる子は、五歳児も四歳児も、どのクラスの子もみんな一緒にある。昨日から意識をもって遊びに取りこんでいる子も居れば、見ていて入ってくる子も居る。教師から離れられないで一緒にやる子も居るし、こちらで少し、あちらで少しといろいろなコーナーを飛びまわって遊ぶ子も居る。とにかく、自分の遊びたいコーナーで、そこに居る教師と遊ぶ。その日の

活動に興味のない子や、自分でやりたい事がある子は、それぞれ自由に遊んでいる。

一日の遊びがすむと、かたづけはレコードの合図で一斉に行なう。それぞれコーナーで自分の遊んだ場でかたづけをさせて、クラスに帰り、給食の準備である。活動の内容によって一日だけのこともあるが、だいたい三日ぐらい、このような形態で遊びを続ける。教師は毎日、子どもが帰った後、その日の子どもの様子を報告しあい、翌日の打合わせをする。その日の様子から、教師の役割分担をしておいたり、材料の準備をしたりする。

このように全国で活動を行なうので、この形態の保育を「全国活動」と呼ぶことにした。

全国活動の内容や形態は、毎回、必ず少しずつ、いろいろなことに気づき、違ってきた。最初は、教師が一日の遊びの環境設定をしっかりとしまし、朝から準備された中で子ども達が好きな所で遊ぶといった様子だった。例えば「動物園ごっこ」。六月ごろ、子ども達はザリガニやかたつむり等よく遊んでいる。そこでクラスで飼っている小動物をみんな集め、庭に出して、ザリガニ、カエル、かたつむり等のコ

ーナーを作り、それにウサギ、アヒルを加えて動物園にした。切符売場、看板を五歳児と用意し、切符を買っては各コーナーに行つて遊ぶようにした。この日一日を子ども達はやっとしたおまつり気分楽しんでたようである。ふだん動物に知らん顔の子も自然と仲間入りしていた。ザリガニやカエルをつかめるようになった子もいた。

しかし、この日の活動から、あまりにも教師が準備しすぎて、子どもの自主性や創造性の発揮がみられなかったのではないかという反省が出てきた。自主的な子どもを育てたいと願っているのなら、教師が表だってひっぱっていくのではない、もっと子どもから出発しなくてはならないのではない、もっと子どもの活動を援助して広げていくようにしなければいけないのではないか等々の話しあいにより、以前より細かく子どもの遊びの状態を把握するよう努力しはじめた。

そこで「水あそび」では、材料や場所の準備はしておいても、先に設定するのではなく子どもの要求によって出していくようにした。遊びとしては、シャボン玉、舟作り、水鉄砲、色水やさん等、いつも必ず出てくる遊びであったが、それぞれ担当した教師と、四歳児も五歳児も一緒になって遊べた。色水やさんでは、教師から表だってやらないようにした



為か、特に盛大なごっこにはならなかったが、五歳児の女子がすり鉢や網を使っていっしょうけんめい色水を作っているのを、四歳児がじっと見ている姿がみられる等、一緒に遊ぶことがよい経験になっていたように思う。

その後、のりものごっこ、お店やさんごっこ、劇遊び等、ごっこ遊びを中心にして、子ども達の遊びの様子をよく把握し、子ども達の遊びを広げていかれるよう注意しながら回を重ねていった。三学期には、ゆうぎ室の大型積木でよく遊んでいることや、巧技台をいろいろに組み合わせ遊ばせたい、冬なのでからだを使う遊びをさせたい等の願いからこれらを使って「ゆうえんちごっこ」をした。卒園まじかのこの時期には、もうかなり友だちと遊びを考えたり、工夫したりできるようにするので、できるだけ友だちと遊びを進めていかれるように考えた。そこで教師は、子ども達の意見を聞く役にまわるように勤めながら、ゆうぎ室の中、いっぱいに巧技台や積木が広げられていくのを手伝っていった。

三日目には、ゆうぎ室にはトランポリンと宙つりタイヤが教師によって準備され、その横には、大型積木をならべた迷路のびっくりハウスが出来あがり、園庭には、巧技台によって、二段スベリ台までの道が作られ、切符売場ができ、切符

売りの人、切符あつめの人が出てきた。四歳児はせっせとお金を作っては切符を買い、遊びに参加していた。子ども達ののびのびと遊べていたように思う。

このようにして、全園活動を一年間、積み重ねてきた。その成果としては――

第一に、どの教師にもなじめ、自分の担任にこだわらず、話をしたり、一緒に遊んだりできるようになったことである。それにより子ども達の活動範囲が広がったし、自分のやりたいことを自分でやりに行くこともだいぶできるようになった。

第二には、四歳児と五歳児が一緒になって遊ぶ場がたくさんあったこと。四歳児と五歳児と一緒に遊ぶ中で、四歳児はずい分と五歳児の遊ぶ様子を観察できた。また五歳児は、四歳児をリードしていくような面もみえた。

第三には、ひとりひとりの興味や能力に応じた遊びの場が持ちやすかったことにより、教師が、年齢にこだわらず、個人個人に応じた指導をすることができた。

第四には、教師間の連けいがスムーズになったことにより、活動がダイナミックに展開できるようになったこと、等

々である。

しかし、問題点もいろいろ出された。第一には、あらかじめ教師が話しあいをしておくので、どうしても準備しすぎたり、教師のイメージが先行したり、子どもを誘いすぎたり等々、子どもの自然のままの活動から、教師の考えた活動になりがちであるということである。例えば、ゆうえんちごっこでも、宙づりタイヤやトランポリンは本当に必要であったか、たしかに活動としてはもありあがり、子どもも楽しんだが、子どもからの要求ではなかった。

第二には、二百四十名という大人数なので、全員の個性の把握をしきれないこと。第三には、園舎の構造上、園庭ならよいが、屋内ではなかなかやりにくいことにより、活動の取りあげ方がむずかしいこと等が出てきた。

そこで五十四年度は、子どもたちの活動を盛りあげていくことと、日常生活との関連性ということを課題としてスタートした。教師がやりすぎないように注意したことにより、例えば、木工遊びではできなかったものが少なかったとか、のりものごっこでは、切符の自動販売機が出なかった（これは前年にとってもよく遊んでいたの）等、前年の活動に比べる

と、活動としての盛りあがりやダイナミックさがいくらか減少したようである。しかしそれらのマイナス面より、子ども一人一人の主体性が充分に生かされるようになってきたというプラス面の方が大切なように思われる。

秋のお店やさんごっこでは、遠足にいつて取ってきたじゅう玉や木の葉を利用して首かざりを作り、できたもので売るかごごっこが始まった。すると、それまでおへやの柵の上に眠っていた空箱で作ったものや、お花、バック等が利用されだし、いろいろなお店やさんができてきた。しばらくすると、これらのお店やさんをやりたい子が、各クラスにいるので一緒にやるということになった。「○○先生は××やさん」と分担を決め、それぞれやりたいお店やさんに集まった。そこで子ども達がお店の場所や作り方を話しあい、それぞれ思い々々の場所で売り買いごっこをしていた。ここまで遊びが広がってきた所で、教師は、各お店やさんに働きかけ、園庭に集め、看板を作ったり、品物を並べる場所を作ったりして、お店やさんごっこを始めた。子ども達は、お金を作って買物をしたり、お店でもうけたお金を持っていたり、お店番と買物に行くのを交替したり、楽しんでた。

それまでは、かたづけの時に全部買ったものをお店にかえ

していただくと、その日は本当に家までもって帰れた。また前年のゆうえんちごっこで出ていた迷路のびっくりハウスも作られ、お客さんを集めていた。どの園でも行なわれているお店やさんごっこで、我園でも毎年行なわれている。形態だけみればあいかわらずなのだと思う。でも、この時、最後にお店を集めて一緒にやるまでは、子ども達が自分達でコッソツと続けてきた活動であったこと、そしてこの遊びの中で〇組は××やさんではなく、どのクラスの子も一緒になってやりたいお店で遊んでいたこと等は、この全園活動の成果ではないかと思う。

もっと子ども達の要求に応じられるように、もっとダイナミックに遊べるようにと出発したこの保育だが、たった二年間の実践ではまだまだ実験中のようなものである。しかし、私たちの目には、以前より子ども達が、確実に自分のやりたいことを自分で行なうようになってきた。一人一人のやりたいうことがはっきりしてきて、それをのびのびと行なえているように見える。そして、クラスにとじこめることがなく、どの教師とも、どの場でも、どの友だちとも遊べるという広い社会性の芽も見られている。

また、教師が常に話し合いをもつことにより、子どもを見る目も自分一人のものでなくいろいろな意見が聞かれるし、クラスの状態を人に伝えなくてはならないことから、より正確に把握しようとする。そして、役割分担も毎回毎回、工夫され、よりよい保育へ向かうという努力がされていると思う。このような良さを生かし、いろいろ出てくる問題点を何とか克服し、子ども達がのびのびと体を動かし、考え、友だちと話しあい、工夫していく姿が見られるように、この全園活動を成長させていきたいと思っている。

◇

◇

今回は、このような形態の保育を行なっているという点しか書けませんでした。たぶん、いったい何をしようとしているのか何がなされているのか、よくおわかりいただけなのではないかと、自らの文章力のなさをなげくばかりです。もし、またチャンスがありましたら、この中の一人一人の子どものようす、遊びのようすもご報告したいと思っております。このような保育について、ご意見・ご批判がございましたら、是非おきかせくださり、ご指導ください。

(岐阜市立加納幼稚園)

## 続・保育の中の小さなこと大切なこと ①

守 永 英 子

このテーマで、以前この雑誌に小文を書いたのは、もう四年も前のことになるであろうか。今回は、「続」として同じテーマで書くようにとのことなので、以前のものを読み返してみた。そこに載せたエピソードの一つ一つに、その時の自分の緊迫感がよみがえってくる。現在の自分の保育にも、これだけの緊迫感があるであろうか。少々不安になって思い返してみると、当時は、三歳児、或は、新入園児を半分加えた四歳児の担任であった。現在は、一年又は二年を共に過ごした五歳児を担当している。その点で、前回と感触の違いがあるのかもしれない。

年長児のクラスといっても、なりたての四、五月では、まだまだ自分を出し切れない子ども達もいる。Y子もその一人で、生れもおそく、友だちのあとについて遊べるようになってはいるものの、いろいろな面でまだ消極的である。昨年は、私の誘いかけにも、「へただからしない」と云うことも

多かった。

年度初めに、子どもの誕生月を示すものを作った時も、Y子は、自分からしようとはしなかった。しかし、ほとんどの子どもが作ってしまい、最後に残った二・三人の子どもを誘った時には、Y子は、思いがけずスムーズに参加してきて、私をほっとさせた。同じ机で、三・四人の女の子が絵を書いていて、Y子がやり始めるのにはよい状況と思われた。Y子の絵が少し形を成してきた時、隣にいたN子が、それを見て、「変なの！」と大声をあげた。

N子は、入園当初から、まとまった絵をかき、自分でもそれを意識しているようであった。性格の強い子どもで、人に負けずけとものをいうところもある。Y子のものじもじした様子に、とっさに私の気持はY子をかばう側に立っていた。「どうして変なの？」と聞く私に、N子は、平然と「だって、こんな大きな顔なんてないもん」と答えた。確かに、Y子の

書いている女の子の顔は大きく、その線を書き始めた時には、私もはっとしたのである。しかし子どもなりのバランスで、その絵は、丁寧になじりかけていた。

Y子の気持を動揺させたくない。私は、あわてて、言葉を探した。「でも、かわいいお人形さんで、よく大きな顔してるわ。赤ちゃんだって顔大きいし。それに、お洋服がきれい。丁寧に書いているから。」こう云いながら、私の力では補いきれないものを感じ、他の子どもたちにも声をかけた。

「Y子ちゃんの絵がきれいだと思う人？」できるだけ軽い調子で、N子に強くひびかないようにとの心使いはしたつもりであった。近くで絵を書いていたM子たちが、成行ぎに気づいていたらしく、自分の活動が続けながら黙って手をあげて、私の気持に伝えてくれた。「お友だちも、きれいって言って下さってよかったわね。」ほっとした私の気持を受け取ったかのように、Y子は、にっこりして、絵を書き続けた。

一人の子どもの、事実に基づいた発言も、時として、他の子どもを傷つけることがある。N子の場合も、強者の弱者に対する態度を含んでいると思われるものの、確かに、N子自身も事実を感じたことを言ったのである。

そこに、私は、むずかしさを感じた。「そう思っても、お友だちにそんなこと言わないのね」と言ってしまうことはやさしい。しかし、N子の心に、その言葉が、しみこむとは思えないし、それに、「感じたことを口に出す」という行為そのものを押えてしまうことに、やはりちゅうちゅうがあった。まして、Y子の自信回復にはつながらない。

このような思いに迷いながら、Y子をかばうことに焦点をおき、N子の強さとY子の未熟さを考えて、M子たちの助力を求めて、その場の力のバランスをとった。そして、N子に対しては、「大きい」というN子の批判を否定せずに、同じ「大きい」ということから、N子とは違った感じ方があること、Y子を支えてくれたM子たちのやさしさが、Y子や私を含んだ輪の中でもかもし出すもの、N子自身の心ない発言が起こした気まずさ——などを感じとってほしいと願ったのである。

その時、N子が何を感じ取ったかは、定かではない。しかしその不明確なものが、現実には、子どもを育てているのだと思う。私の願ったものが、私のとった方法の中で通じたかどうか、それは、子どもが育つ姿の中で私自身が気づかなければならないものであろう。（お茶の水女子大学附属幼稚園）

## 遊びの発見 ②

有木 昭久

(あだ名・アリンコ)

### 移動大作戦

#### ① 移動あそび

「こっちのチームはこの線の上に、こっちのチームはあの線の上に立って並んで下さい。」

……(さあ並べたけど何をしようかな)

「さあ並んだかな。エ—— ヨーイドンの合図があったら、相手チームの線にむかって、ぶつからないように走っていつて早くきちんと並んだチームの勝ちという遊びだ。(ホッ) ヨーイドン」これは川崎市のA幼稚園で、年長八十人をたまたま、二チームに分け線の上に立たせて、とっさに出た遊びが、この移動あそびであったと、所員の斎藤登氏が語って

くれた。

この時の指導は見ていなかったが、この遊びの話を聞いて、「これは面白い」私も現場でやってみようと思った。

#### ② 「模倣」から「感じ」をつかむ

考えもなしにとっさに出た遊びが、子どもの心をつかむものが多い。遊びとはそういうものなのかもしれない。

横浜市のN幼稚園で初めて、年中児四十人とこの遊びをやってみた。棒で二本の線を二十メートル位離して、二十人位が並べるように書いて、まず男の子と女の子のチームに分けて、それぞれ線の上に立つように指示した。

「みんな線の上にたったかな。男の子のチームは、女の子のチームの線へ、女の子のチームは男の子のチームの線まで走

っていきます。どちらの方が先に全部つくかな。途中でぶつからないようにうまく走っていくんだよ。わかったなら、それではヨーイドン」

子供達が一斉に走りだした。真中頃になると、丁度すれ違うのだが、一瞬ヒヤリとする。ぶつかる子がいるのではないかな……。案の定、途中で一人がころび、一人が相手とぶつかってひっくり返った。

「エーンエーン」と泣きだしたが、一人は自分で起きて又走りだした。

一人はその場で泣いている。他の子はまだ全員相手の線に立っている。泣いている子のチームの子が、

「オーイ早くこいよー」といったかと思うと、四人の子どもが走って、その子を起こして、自分のチームまでひっぱってきた。そして「泣くなよ」その子は涙をふいて並んだ。

私がかがの有無を確かめる間もなく、子どもが声をかけたので、そのままにしておいたが、涙をふいてきちんと並んだその子の姿をみて、ホッとした。

「さあ、うまく線の上に並べたかな。内側を向いて、きちんときをつけができたかな」子供達の中には、外を向いている子も何人かいたが、この言葉をきいて、きちんと並ぼう

と、必死であった。男の子の何人かが、まだ手をブラブラしていた。

「この勝負、女の子の勝ちー」

「ワッ」と、女の子のチームの大歓声。

男の子はくやしそうな顔をしている。

(自分の説明不足が多く、これはいけないと思って、)

「さあ、もう一度やってみよう。こんどは、皆自動車になつて、ぶつからないように上手に運転しよう。向こうの線にいたらこつちを向いて、手を上にあげて、もう私は着きましたよというしが全員早くできたチームの勝ちだよ。ちよっとアリンコがやってみるからね。」

(ここで見本をみせた。)

「さあそれではいくよ」

女の子のチームも男の子のチームもいつの間にか、

「エイエイオー」とかけ声と共に手をふりあげた。

「ヨーイドン」

こんどは皆上手にすりぬけた。ごちゃごちゃがワッとすりぬけたかと思ったら、線の上にピタッととまつて、手が上にあがる。

急に静かになったので、私もびっくり、何だかおかしさが



女の子のチームの勝ち」

「アリンコ、もう一回、もう一回やろうよ」

「よしもう一回やるぞー」

皆がうまく並ばないと、勝てないという、ルールを理解し始めた。

### ③ 「感じ」から「展開」

この遊びは、緊張（ヨーイ）弛緩（ドン、すりぬけるところ）緊張（並ぶ）の流れが程よい楽しさを持っているのではないかと、思う。この遊びを何度か行っているうちに、ただ走ってすりぬけるだけでなく、ある形の姿をして通りぬけたらどうかと思って、こんどは走らないで、

「片足でケンケンして、向こうの線までいってみよう」

こみ上げてきた。

両チームをジロジロと見る。お人形さんのように、じっとしたままだ。男の子の一人が手をおろしてしまった。

「ウウ、残念、この勝負又

そして次に、「うさぎになってみよう」

すると子供達の中から、

「変身のポーズでやろうよ」

「どんなところがいいかな」

すると次々にポーズをだしてきた。

「よし、ワカッタ、最初はAくんのポーズでやってみよう。

A君もう一回皆にどんなかつこうか見せてやってね」

ポーズをつくる。

「わかったな。じゃ皆でそのかつこうをしてみよう。Aく

ん、皆できてるかみてね」

「まだ、あの子ちょっと違うなあ、こうだよ。こう、そう」

「ではいくよ、ヨードン」……

こうして、次々と子どもからでてきたポーズで、遊びが続けられた。

雨が降って外でできなかった時に、ホールで「赤ちゃんハイハイ」「魚」「カンガルー」「インベーター」「カニ」「ヒヨコ」「ヘビ」「カエル」になって、できるだけはったりとんだりする遊びにした。

園外で行なった時は、「ワーツ」とすれ違う時も、ついからも大きな声を出す方法や、忍者といって音もなく走る方



法も展開したが、実に楽しかった。



#### ④ 「展開の転回？」

昨年の八月に、広島の講習会で、年長児四十人を、実際に舞台にあげて、ただ走って、移動する遊びを行なった。(私も初めてこの場で出会った子ども)

二回すんで三回目をやったところ、全員の子供がそれぞれ相手のチームの線の上に立っているのに、一人の子どもが、ノンビリと、おじいさんの格好をして、ゆっくりと歩いているのです。他の子もびっくり、私もハッとして見とれてしまいました。会場からは、拍手がおこった。

ルールを知っていながら、尚かつ自分で考えた動作をみて、もう勝ち負けは私の外にいつてしまったのです。その時、私がどんな言葉をいって、その結着をつけたか、確かでは

はないが、

「○○くんのすごく面白かったね。次は、○○くんがやっていたおじいさんでやってみよう」

「ヨイドン」

みんなおじいさんになって、

移動をはじめた。

オヤオヤ、又彼が一番のんびりしているのです。アレッ、こんどは、首と手をピコンピコン動かしながら、少しづつ進んでいる。

又会場から拍手が起こり、その動作の面白さに私もころげまわってしまった。突然予想もしない動きに、おたおたしてしまい、自分がどんなふうに、子供達と接したか、定かでないが、やつのことで、その場を、しのいだ、という感じだった。その後、他の遊びをしたが、このことがあってから、より楽しい遊びになったと覚えている。

#### ⑤ 「一人から二人・三人……」

今迄の移動遊びは一人で動いていたが、二人で手をつない



で、移動したら、これもなかなか楽しく展開できた。親子のつどいの時には、お母さんが子どもをおんぶしたり、子どもがお母さんをひっぱって、歩いたりした。

三人、四人……五人になると、すれ違う時、とてもむづかしいのですが、だんだん慣れてくると、大変上手になった。

## ⑥ 「おじゃま虫の登場」

年長児もだんだん慣れてくると、動きのはげしいあそびが好きになってくる。前に磁石の遊びもやっていたせいか、この遊びに、ひっぱりっこを入れようということになった。

「ヨイドン」の合図で移動して、途中すれ違う時に、お互いにつかまえて、自分の進む方向に相手をひっぱっていつてしまう遊びである。

「ドン、の合図でゆっくりと10数えるよ。その間は、相手をおさえたり、つれてきたりしてもいいんだ。でも10になったら必ず手を離すんだよ。いいかな」

この遊びも最初のうちは、始めに立っていた自分の陣の線につれてきたり、10数えても、なかなか離さない子もいた。特に何もしないで、そのまま通りすぎる子には、少しでも、引っ張り合うようにしてみたり、数え方も速くしたり、

ゆっくりやってみた。

こうして移動あそびが次々に展開されてきたが今後この遊びが、どのようになっていくかわからないが、とても楽しみの遊びの一つになった。

## あくしゅでこんにち

### ① あくしゅ

この遊びは、私の大好きな遊びの一つである。

「みなさんこんにちは、このお兄さんは、（自分を指さして）『ありんこ』っていうなまえです。今日はみんなで、にぎやかに身体を、動かす遊びをしましょう。よろしくね」

「へえーありだってよー」

「ちつとも、ありみたいじゃないな」

「ありんこなら、小さくなってヨ」等と、子どもが口々に言う。

自己紹介って本当にむづかしい。

「君の名前何って言うの」

「○○○○」

「ふーん、そうか。いい名前だね。よろしく」（ここでその

子とあくしゅをする)

すると近くにいた子が、

「ぼく〇〇っていうんだよ」

「そうか〇〇くんだね。よろしく」

(またここであくしゅをする)

そうすると、他の子供達が口々に、

「ぼくねーわたしねー」と名のりはじめ、

「ぼくにも、あくしゅして」といいはじめ、だんだんとにぎやかになってきた。

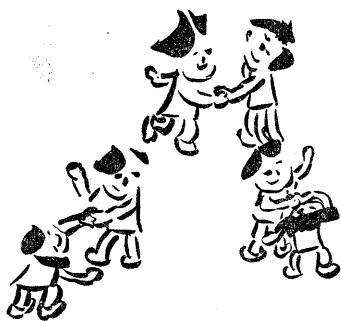
「よし、じゃみんなとあくしゅをしようね。ありんこと握手した人は、座って見ていてください。」

次々に、「こんにちは、よろしく、こんにちは、よろしく」と一人一人と握手をしていった。いそがしくかけずり回って、四十人が終わると、もうくたくた。声を出しながら動くのは、なかなかの重労働。

(そうだみんなも同じようにやってみたら?)

② 「こんにちは、さようなら」

「もうみんな友達がいっぱいいるね。今日はね、友達と握手をする遊びだよ。(一人の子をだして握手をしてみせる)」



こうやって、友達と握手をして、『こんにちは』って言うんだ。そしてその後すぐ手をあげて、『さようなら』といって手をふろう。したら又二人ともちがう子を見つけて、握手して、さようならをするんだ。そして、『ヤメー』の合図返すつとやっているんだよ。いいかな、ヨイドン」

「こんにちは、さようなら」

「こんにちは、さようなら」のにぎやかな声が聞こえてくる。私も一緒になって参加しながら、ポカンとしている子に声をかけたり、握手をする。ころあいを見て、

「ヤメー」の合図をする。子ども達はまだ、汗いっぱい。

「たくさんさんの友達と握手ができたね。こんどは、五人の友

達と握手ができたなら、座るんだよ。」

「ワ」

さきほどのにぎやかさより更に声が大きくなって、スピードがでる。のんびりしていると、だんだん握手をする子がいなくなる。

その時は私が人数分だけ握手をしてあげて、

「アーよかったね。こんどは六人だよ」

こうして十人程もやると、もう汗だくだく。

### ③ 「二人はなかよし」

「この間はいろんな人と握手をしたね。今日は、ありんこのまわりを元気に走ってください。途中で、『二人はなかよし』といったら、一人友達を見つけて握手したまま座ろう」

「では元気に走れ——……」

「二人はなかよし」

ワイイ、ワイワイワイ

次々と子供達は、二人で握手して座っていく。

「今度は、ちがう友達と仲良しになろうね。では今手をつないだともだちと、かたーい握手をしてごらん。（みんなの様子を見て）さあもういいかな。それではさようならをし

て、又走りましよう」

「さようなら……」（みんな走りまわる）

「二人は仲良し」

こうして何度も行なった。

### ④ 「二人組あそび」

二人で手をつなぎ終ったあと、二人でできる遊びを展開してみた。

「お船がぎゅっちらん」

「ジャンケンお尻たたき」

「ジャンケンもぐり」

「ジャンケンおんぶ」「ひっぱりっこ」等です。この遊びの中にはさんで行なうと、又大変楽しくなった。そうこうしているうちに、ただ座るだけでなく、ひっくり返っている子や、だきあっている子を見つけたので、

「こんどは二人で好きなかつこうをつくってごらん」

「二人はなかよし」

子供達は色々と工夫をする。とても楽しいかつこうができたので、そこでこれに名前をつけることになった。名付けて、「ポーズ大作戦」



次からはふたりはなかよしとは言わないで、「ポーズ大作戦」という言葉でやってみた。面白いポーズができたチームに、拍手をしてあげたら、他の子ども達は負けずに、面白いポーズをつくるようになった。この遊びを運動会でやったのですが、この時は10秒間静止で、ビタッと動作をとめるところと、どんなポーズが生まれるかわからない楽しみがあったので、好評を博しました。

ある時は、この中から面白いポーズをみつけ、「○○ちゃん」と○○んのつくったポーズをみんなだまねっこしてみよう」とか、組体操の時に使ったので、子ども達も得意顔であった。

#### ⑤ 「人数を増やす」

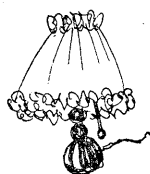
二人はなかよしから、人数をふやして、「○人はなかよし」と展開し、人数がうまく集らなかったチームは、こんどはがんばるように、「エイエイオー」をさせたり、「おまじない」をかけるのもいい方法でした。冬の寒い時、「○○はなかよし」で集まった子ども達同志、手をつないで、他のグループと、「ワッショイ、ワッショイ」といつて、ぶつかり合う遊びになったり、輪のまま、手をつないでポーズ大作戦もやってみましたが、このように、握手から始まった遊びが次々と子どもとの現場の中で、どんどん変化し、動いていき、同じあそびを展開したとしても、「あそび」はそこに集まる子どもによって、変わっていきました。そこが実に楽しく又大切なことだと思えます。

いつも毎回楽しくできたなどということはありません。試行錯誤しながら、子供達同志がより多くふれ合ったか、どれだけ一方的にならずに、みんなでつくったか、反省しながら子どもとふれ合いたいものです。

(日本児童遊戯研究所)

わたくしの

## シルクロード ⑥



横張和子

### 経錦について

前々回につづき、パルミューラの廃墟で発掘された絹織物について書かせていただきます。その④は錦です(図1)。

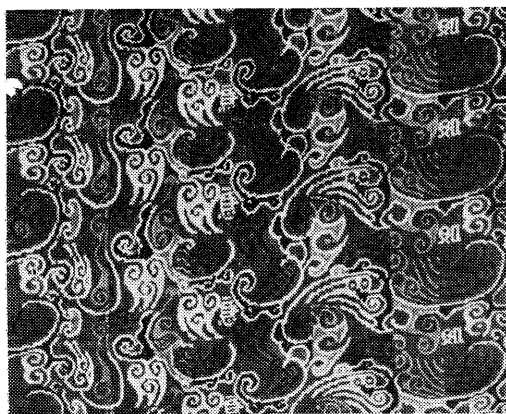
パルミューラ出土の錦は四十六号塔墓の地上第一階の墓室の床の上で集められたのですがもはや小断片でしかなく、今はダマスカス国立博物館に玻璃装となって展示されています。それは藍地に濃淡の茶、白、緑などの色糸を用い、中国特有の雲の文様や動物文が織り出されているようで、小さな断片群からそれらが僅かに認められます。印象的なのは白糸で「萌」と読まれる漢字が織り出されていることで、これは「萌」でありましょう。瑞祥の意味がこめられた錦であったと考えられます。この漢字によって、これが中国の絹であると認めるのに異存のないところでしたが、このように織銘のある漢代の錦はほかに少くありません(図2)。

パルミューラ発見の漢代の錦はシルクロードの最西端を限る、しかも唯一例の資料となっています。それが発掘されるまでは、歴史家の間でも中国錦がローマにまで運ばれてきたという見方には消極的で否定的ですらあったのです。しかしローマの属州であったシリアに発見されて、中国錦の到来は歴史的事実となり、その

有力な証拠となったのです。今日の航空機の距離感からすれば、中国とローマの距離もさしたるものでなくなってきましたが、往時の絹輸送は地上を一步步踏みしめていかねばなりません。極東アジアの乾燥地帯の自然の酷烈なことは、今、茶の間でテレビ放映で知ることが出来ますが、そこを往く隊商の困難はそれでも想像を超えたものであったでしょう。しかし人々にそれを強いたのは、どこまでも優しく美しい絹であったのです。人間



▲図 1 パラミューラ出土の漢代の経錦



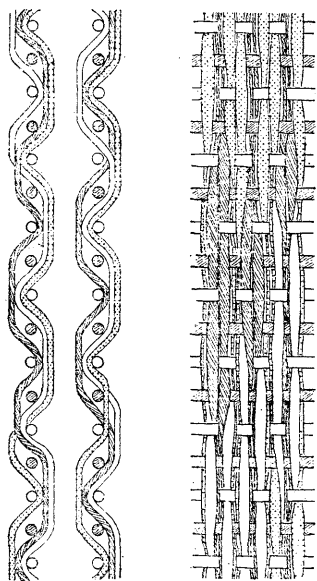
▲図 2 新疆省氏豊ニヤ出土の漢代の経錦 如意の織銘がある

の欲望がなせる業でしょうか。  
ところでパラミューラに出土した錦は経錦（けいきん、たてにしき）といわれるものです。これは経糸で模様を織り出しているもので（図3）、これに対して緯錦（いきん、ぬきにしき）というのがあります。これは緯糸で顕文された錦のことです（図4）。わが国の奈良時代の染織品を収蔵している正倉院の、中でもその錦類の主流をしめているのか、この緯錦です。例えば楽器の琵琶を包

む袋を作っていた浅藍の地に、白、黄、緑、深緑、縹、赤、紫などの彩色を緯糸にして暈縹（うんげん、ぼかし）に配彩して、大きな唐草の華文を織り出しているもの、また紫の地に、白、黄、浅緑、赤、紫などの彩緯を用いて葡萄唐草の丸文に一羽の鳳をあらわした賦（しよく、肘掛け）を作っているものがそれで、いずれも大きな文様と多彩な図様で絢爛の美しさを放っています（図5）。緯錦の意匠にはペルシャ的なモチーフが多く、技法的にも西方的な性格がみられます。中国でも古いものにはなくて、隋唐以後にみられます。そこで隋唐緯錦の源流をペルシャに求める説があります。わたくしもそれをめぐっていろいろ考えているもの

◀ 図3 経錦の組織図

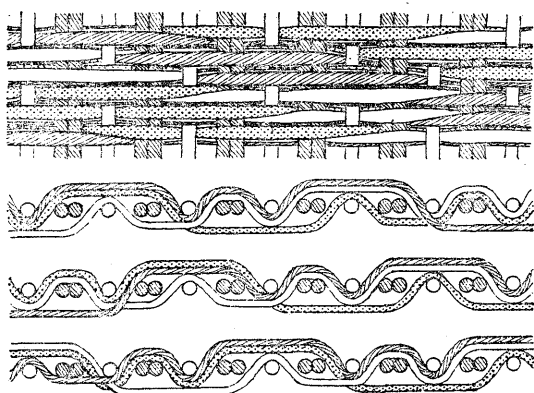
佐々木信三郎著「日本上代織技の研究」より



の一人です。しかし緯錦の発生をめぐっては、これまでのところ、定説に達しているものではなく、依然として、それが何処で、何時ごろあらわれたかという点に関してはまだ曖昧なところがあります。しかし殊に、中国の考古学によると、それはどうやら中国の西北の辺境の少数民族で、羊を飼い、毛糸を紡ぎ、毛織物を織る人々の間で生み出されてきたようです（図6）。それがササン朝の

◀ 図4 緯錦の組織図

佐々木信三郎著「日本上代織技の研究」より

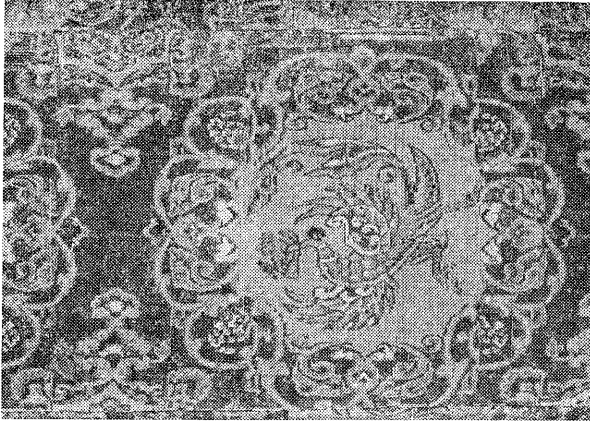


ペルシャで洗練され、熟成されて今度シルクロードの流れを反転させて（図7）、西から東へ、そして中国にまで及んだと考えられます。つまりはじめに経錦があり、これが絹の道をローマに向けて、西漸する道すがら、緯錦の法を生み出させたのです。何故、毛織物を織る

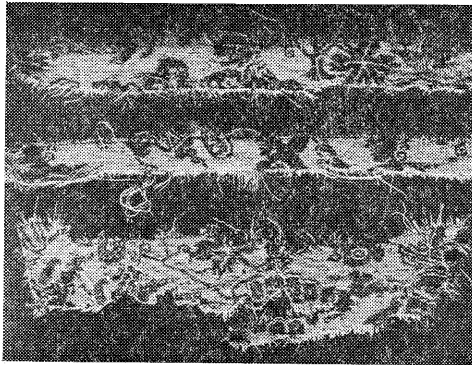


人々の間で、はじめられたかという理由はまた別の機会でお話しさせていただきますが、緯錦が誕生し、やがて中世芸術の粹にまで発展し、世界的な拡がりをもつに至ったにせよ、その模範となったのは経錦であったことに間違いありません。

◀ 図5 正倉院蔵御軾の緯錦

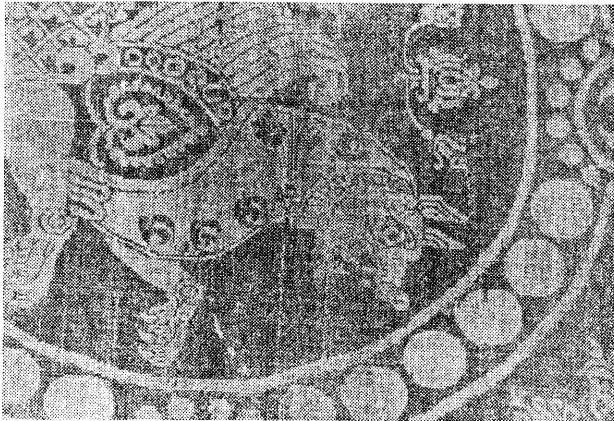


◀ 図6 毛糸で織り出された緯錦  
新疆氏豊ニヤ後漢墓出土



今日、経錦は、中でも漢代のそれは内陸アジアの各地で発掘され、技法や特質についてはかなり詳しく分かってきております。日本には漢代の染織品の渡来はなく、従って漢錦をみることは出来ませんが、しかし三国蜀の錦を伝えるという美しい赤地の蜀江錦

◀ 図7 ベルシアの緯錦  
イギリスピクトリアアンドアルバート美術館蔵



が法隆寺献納宝物の中にみられます。そのほか正倉院裂の中にもみられますが、いずれも緯錦に比べると古式で、文様も小型となっています。経錦の技法を簡単に述べますと、三乃至四色の彩糸を一組にし、経糸の一本とみなし、機上にわたします。そして空引機という紋織の装置を使って、頭文に必要な彩糸を一本だけ布の表に出し、残る彩糸は陰緯と呼ばれる緯糸で、その裏側に押えます。そして次に織物として地を織るために地緯を入れて平織します。この二種の操作を交替に行なって紋織物を作り上げていきます。出来上がったものでは経糸が重なって、綾などに比べてぐっと厚く、また帛面では緯糸を三越とびこえた長い経糸ばかりがみえていて、緯糸はすっかりかくされてしまっています。経糸の密度を数えますと、新疆の民豊のニヤの遺跡で発掘された後漢時代の経錦では表にあらわれているものだけでも幅間四〇―四四本、三重経の錦ですから実際の経糸の数はその三倍の一二〇本余。その織幅は四〇幅ほどですから、経糸に用いられたその総数は約五〇〇〇本に達します。この錦には「延年益寿大宜子孫」の銘が織り出されていましたが、非常に精巧なものでした(図8)。

錦は中国の春秋時代(前七七―四〇三)の文献である「詩経」や「左氏伝」などにみえ、錦で衣、裳、衾が作られたことが記されています。そして次の戦国時代(前四〇三―二二一)に入



▲図8 「延年益寿大宜子孫」の銘のある経錦

ると、実際の例を遺物にみることができます。一九五三・四年の兩年にわたって中国の湖南省長沙市で、戦国七雄の一つであった楚の墓が相ついで調査され、それによって、これまで知られなかった古い錦の遺物が発掘されました。そのうち左家塘出土のものは中国の考古学雑誌の『文物』(一九七二、二期)誌上に色刷の図版で掲載されています。それによると経糸の彩糸は褐色と赤と黄の三色の二重経錦で、褐色の地には黄で相對する竜文を、黄の地には赤で小さい花文と幾何学文風の模様を織り出しています。図版のもう一つは褐色の地に赤で、中国特有の三つの菱文やN字形など角張った文様、つまり矩文を織り出しています。いずれも

経糸の方向に文様を繰り返し織り出していますが、これはさきに述べた紋織の装置を使っているからです。それは原理的に京都西陣の高機やジャカード織機とは変らないもので、中国の機法の偉大な発明といつてよく、ヨーロッパで使われるようになったのはかなり後のことです。

ところで褐色の矩文錦には黄絹が縫いつけられ、そこに「女五氏」の三字が墨書されています。また錦の表には朱印が捺されています。これにより、絹織物の生産の担手が女で、士大夫階級の婦女子も機織に従っていたこと、そして貢納や自家消費の分を除いた余剰分は市場に出したことなどが知られます。

錦は漢代に入ると一般庶民にも浸透し、また国外からの需要も迫られて、生産は急激に増加していきました。女子は早くから織物を学び嫁に入っては朝早くから夜半まで機織を続け、休息の間もなかったほどであったといえます。その仕事振りを伝える詩があります。漢から梁までの古詩を集めた『玉台新詠』という詩集にみえる無名の詩人の長篇の叙事詩です。佐藤武敏博士の『中国古代絹織史研究』（東京風間書房）より引用させていただきます。時は後漢獻帝の建安年間のこと、盧江府の下級官吏の焦仲卿の妻劉氏は仲卿の母に家を追い出され、入水して自殺してしまいました。これを聞いた仲卿も庭の樹で首をくくって死んでしまうとい

う悲話を詠んだものです。そのはじめの部分です。

孔雀 東南に飛び  
五里 一たび徘徊す  
十三 能く素を織り  
十四 裁衣を学ぶ  
十五 箏篋を弾じ  
十六 詩書を誦す  
十七 君が婦となる  
心中 常に苦悲  
君既に 府吏となる  
節を守りて 情移らず  
賤妾 空房に留まる  
相見る 常日も稀なり  
鶏鳴 機に入りて織る  
夜夜 息むことを得ず  
三日 五匹を断つ  
大人 故遅きを嫌う  
織の 遅をなすが為めに非ず  
君が家の婦とはなりがたし  
妾 駆使せらるるにたえず

徒らに留まるも施す所なし

便すまわち公姥もに白し

短に及びて相遣わして帰ら

しめらるべし……

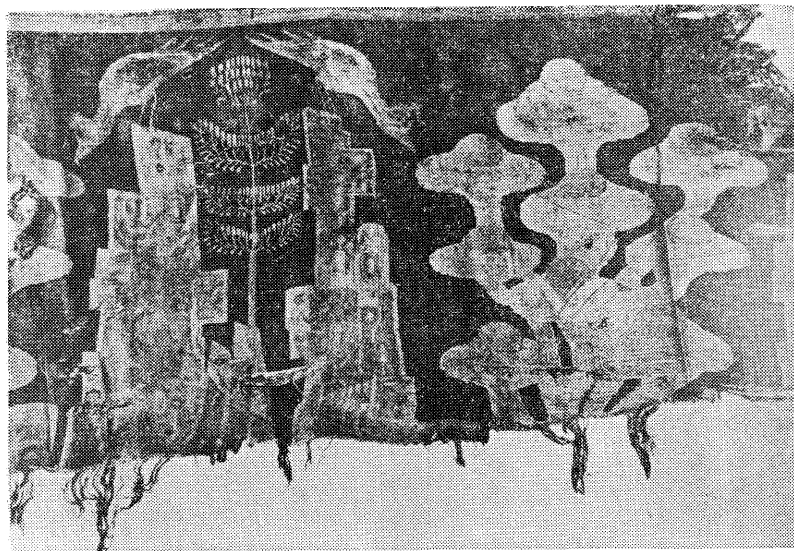
かなりの教養をもち、貞淑で、労働をいとわなかったにもかかわらず姑に氣に入られず、いたたまれなくなっている封建時代の嫁の哀切な思いが伝わってきますが、これによると鶏の鳴く明け方から夜半まで休む間もなく織って三日で五匹を織り上げたことが知られます。一匹は漢尺で幅二・二尺（五一・五釐）、長さ四丈（九・三六米）ほどであったようですから、可成りの量を織り上げていたことは分ります。彼女の織った絹織物は紋織物ではなく、経糸の多い目のつんだ鎌という平絹であったと思いますが、それに用いた機は前回にご覧に入れた漢の画像石にみられる斜めに傾けられ、二本の踏木のついた織機であったと想像されます。

紋織物を織った空引機はこのような画像石の浮彫に見出されてはいませんが、文献ではそれを叙するものがいくつかあります。空引機というのは複雑な文様を織るためには、そしてそれを機械的に繰り返すためには、その単位文を織る文緯の数だけの文緯もんばたが必要とされます。先の民豊ニヤの錦では五十数枚が必要であったということです。このような綜統の開口はもはや二本の足の操作

では不可能なことで、そのため機の前方に高い櫓のような台をしつらえて、そこに人がのり、別途に文綜に連繫した通糸を順繰り引き上げて、経糸の開口を行うように仕組んだ織機のことです。

後漢の文人の王逸の「機婦賦」にはその空引機を思わせる詩句がみえています。表現は頗る文学的、比喩的ですので想像をたくましくして考えねばならないように、理解するには余りに難しい語句が並んでいますので、分りやすいものだけをとり出してみます。「高樓双峙」「下臨清池」「游魚銜飼」などは理解できます。

つまり高樓とは、機の前方に立てた櫓の台上から下の方を臨めば、水平にわたされた絹の経糸たの平らに並んだ様を清池にたとえたものであったでしょうし、そこに飛び交う杆かんは、游魚が飼えを銜くはえる様子にたとえたものでしょう。また前漢の雑事を記した『西京雜事』にも、紋織を織る織機についての叙述があります。要約しますと、霍光かつこうの妻が葡萄の模様のある錦を二十四匹、多くの花を散らせた綾を二十五匹を織った。その技法を伝えたのは、綾の産地で有名な鉅鹿の陳宝光の妻であった。そこで用いられた織機では、百二十枚の綜統そうどうが用いられた。そして二ヵ月かけて、ようやく紋織物が一匹織りあげられ、その値は万錢であったということです。こうして漢代の絹業の活況のさまが、知られるのですが、増産された多くの絹織物は、中国の最も重要な輸出品とし



▲図 9 北蒙古、イン・ウラの匈奴墓出土の経錦

て、国外に流出します。それは中国人が漠とした知識しかもちえなかった遠西のローマにまで送られていきました。馬や駱駝の背に積まれ、酷烈な自然に苦しめられるばかりでなく、馬を駆使する遊牧民の掠奪の脅威にもさらされ、いくつもの徴税の関門をくぐって、ただひたすら運ばれていったのです。それによって壮大な東西交渉の道が開けていったのです。それへ駆りたてたものは何であつたでしょう。率直に、それは物質に対する欲望のため。他に他ならなかったといえましょう。人々は贅沢をのぞみ、絹商人は莫大な利潤を手にし得ました。しかしそうして開かれた道は、仏教東漸の道ともなり、東西の文明の交渉の道ともなつたのです。そして染織文化においても新技法が、この道に芽生えてきます。すなわち緯錦の出現です。それについてはまた述べることにいたします。

経錦は唐中期ごろ、緯錦の興隆の影に姿をひそめ、やがて絶えて行われなくなってしまう。しかしその栄光は古代の絹織物史の中でおお壮重な光を放っています(図9)。

(山脇女子短期大学)

## 『復刻・幼児の教育』〈大正・昭和篇〉

### 〔趣旨〕

『幼児の教育』誌は、明治三十四年『婦人と子ども』と題されて創刊されて以来、今日に至る迄八十年の長きに亘り、わが国幼児保育の発展と歩みを共にして来た。この間、幾多の先駆的保育理論、実践研究発表等が誌上を飾り、わが国の幼児教育の発展に測り知れない寄与を成して来た。現在まで継続する幼児教育専門誌として、わが国最古最長であるのみならず、雑誌出版史上、極めて稀有な例を示している。

本書は、昨年刊行の『復刻・幼児の教育』（第一期・明治三十四年～大正九年）に続き、大正十年～昭和十九年の二十四年分、二十四巻を、一挙に復刻刊行するものである。大正・昭和期はわが国幼児保育が日進月歩の高進を示し、時代背景もめまぐるしい変貌を遂げた時期にあたる。

わが国の幼児教育の進歩の様相を概観する好個の原資料として、また先達の抱負や熱意の結晶する稀有な文献として、現代保育を考える人々に資することを念願する。

### 〔体裁・内容〕

全二三巻、別冊著者別索引、A5判、クロス装、外函入、題字・東山魁夷

《第二一卷～第四四巻》大正十年～昭和十九年

『幼児教育』（第二三巻第八号まで）

『幼児の教育』（第二三巻第九号以降）

○原則として一年分を一巻に合本（第四三巻・第四四巻を一巻に合本）

○総頁数・約二万頁、各巻平均八三〇頁。

○各号表表紙から裏表紙まで、広告頁も含めて、完全復刻。

○色刷の表紙もできる限り原本に近い色で再現。

○復刻にあたっては原本を尊重し、原則として修正を加えない。

《著者別索引》

・本文二四頁程度。

・戦前版通巻（第一巻～第四四巻）の総執筆者を収録。

・〈個人名〉、〈ペンネーム〉、〈団体名〉別に収録。

## 〔刊行〕

名著刊行会

## 〔定価〕

現金価格 二二五、〇〇〇円

## 〔申込・問合わせ先〕

総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 千代田区神田神保町三―二五 精和ビル

TEL (〇三) 二九五―三五六一

大阪本社 大阪市西区北堀江三―六一二三

TEL (〇六) 五三一―九八〇一

## 第二版復刻版の時代

本誌復刻版〈大正・昭和〉ができました。私共現場のものには魅力の時代ではないでしょうか。

幼児教育の創始時代から、ぐっと大変革のおきた時代、そしてそれが実践され、現場の内容においては全盛時代とも言うべき時だったと思います。

現代の幼児教育の根源はこの時より湧き出で、その変革は現代に実をむすんでいるとも考えられましょう。

倉橋先生は外国の幼児教育を学び、研究され、それを基にして日本の幼児教育が、積木を保育室の床の上におろされた所から改革され、現在も倉橋理論と言われて、研究し実践されているのも、このよき時代を根本とされ、現在の幼児教育に至ったのではないのでしょうか。

「幼児の生活はあそびである。そのあそびの生活の中で幼児は経験し、学びとっているのだ。そしてその生活の中で成長

している。」

この根本の考え方は勿論、現在もゆるがずその考えの上に実践されています。

大変ユニークな実践例も、豊かに紙面を賑わせており、その生活記録は、現在でもうらやましいような、生活、経験の数々の記録があります。時代がすすめば、教育の内容や経験の面は変化するのが当然ですが、現在の幼児の生活の中にも、今だに先在している要素は、同じものもあると思います。その点の表現、そして伸長は、よき時代とは言え、現在の現場保育者としては反省すべき点を多々、読みとれます。遠大な、そして繊細な実践は私共の心を動かしてくれ、現代の幼児教育のみなおしも促してくれます。このように現場にとつての豊富な資料として、又倉橋理論の根源の探求は現在の幼児教育、これからの幼児教育の光となってくれると思います。

(堀合文子)

## 幼児の教育 第七十九巻 第十号

十月号 © 定価二五〇円

昭和五十五年 九月二十五日 印刷  
昭和五十五年 十月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

118 東京都港区三田四ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一  
発行所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

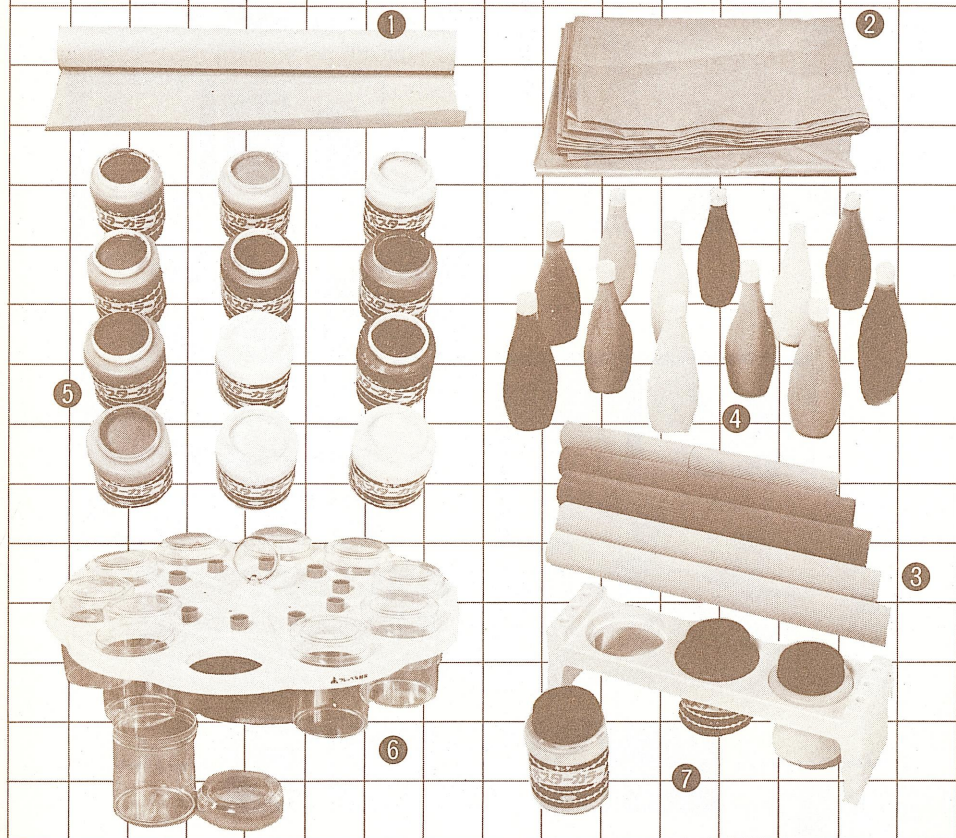
© 本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。



フレーベル館の

# 絵画・素材用品



①不織布(ロール巻)  
2本1セット 5,500円

②造形シート  
180cm×260cm 4,600円

③色鉛筆(ロール巻)  
4色10本1セット 3,300円

④キダーポスターカラー  
12色1セット 9,000円

⑤キダーポスターカラー 広口  
12色1セット 17,000円

⑥カラースタンドA  
直径42cm 6,500円

⑦カラースタンドB  
プラスチック製 1,800円

●カラーモール  
10色1,000本(各色100本)  
1セット 3,800円

●ニューボール  
5色250本(各色50本)  
1セット 4,500円

●発泡ボール  
50個1セット 大 1,600円  
100個1セット 小 1,200円

●竹ヒゴ  
2束(1束100本)  
1セット 1,700円

●両面おりがみ  
10色1セット 3,600円

●クレープ紙  
8色1セット 1,900円

●壁画セット  
10色1セット 1,600円

●絵筆  
20号10本1組 4,200円  
18号10本1組 3,600円  
16号10本1組 3,100円  
10号10本1組 2,000円

●刷毛 300円

くわしくは、フレーベル館代理店、支社、支店、営業所、特約店または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

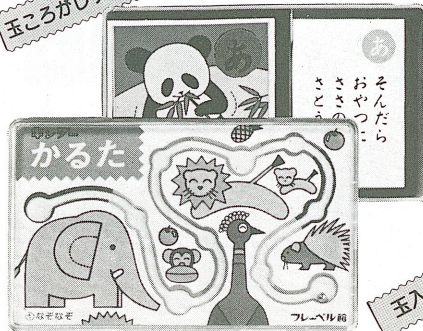
フレーベル館



楽しく遊びながら、ことばや数に親しめます。

# かるた

玉ころがしゲーム付!



ゆかいな、動物のなぞなぞがテーマ!

キンダーかるた①〈なぞなぞ〉

プラスチックケース入り 350円

文・小沢 正  
絵・今井俊展

玉入れゲーム付!

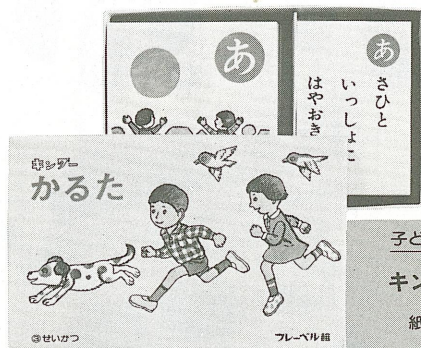


日本語や、世界中の童話で構成!

キンダーかるた②〈おはなし〉

プラスチックケース入り 350円

文・西本鶏介 絵・不肖秀夫



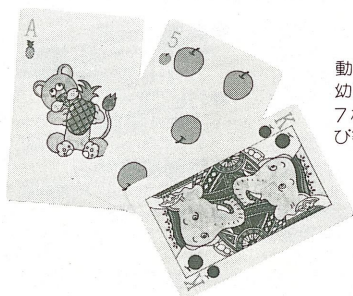
子どもの生活がテーマ!

キンダーかるた③〈せいかつ〉

紙ケース入り 250円

文・桜井信夫  
絵・富永秀夫

## 幼児トランプ



動物と果物のマークをくみあわせた楽しい幼児用トランプです。1/1/抜き、神経衰弱、7ならべ等のトランプ遊びのほか、数遊び等の教材としても使えます。

87×57ミリ〈54枚〉

プラスチックケース入り 300円

ケース絵・高橋 経

カード絵・尾崎真吾

くわしくは、フレーベル館代理店、支社、支店、営業所、特約店または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館